

大峰ヶ台遺跡

—第4次調査—

1995

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

大峰ヶ台遺跡

—第4次調査—

1995

松山市教育委員会
財團法人松山市生涯學習振興財團
埋蔵文化財センター

序

松山市のシンボル松山城がそびえる勝山と相対するように並び立つ丘陵、そして市民の憩いの広場としてはぎわう松山総合公園のある丘陵が、本書で報告される大峰ヶ台丘陵です。この大峰ヶ台の頂上に立つと、松山平野全域はおろか、遠く瀬戸内の島々や、石鎚連山を一望することができます。

大峰ヶ台丘陵および、その周辺地域には、松山平野でも指折りの有名な遺跡が分布しています。松山市における本格的な埋蔵文化財調査の発端となった「占照遺跡」や、古墳時代前期の首長墓とされる「朝日谷2号墳」などが、その代表的なものです。

本書で報告される大峰ヶ台遺跡4次調査地からは、丘陵頂上部周辺に漫開する弥生時代中期の集落の一部が検出されました。稲作に不適な高所に営まれた弥生集落の性格については諸説あるようですが、本調査によって、この種の集落に関する貴重な一資料が加えられることとなります。

本書が、弥生時代の集落研究をはじめとする各方面に、広く活用されますことを心から願っております。

平成7年3月31日

財團法人 松山市生涯学習振興財團

理事長 田中 誠一

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会が松山市南江戸所在の松山市有地内において、昭和62年から63年にかけて実施した発掘調査の報告書である。

2. 調査は、松山総合公園建設の事前調査として行われた。

3. 松山市における埋蔵文化財調査部門の松山市教育委員会文化教育課から財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターへの平成3年度移行に伴い、本書の刊行は同財團が行った。刊行にあたっての組織は以下のとおりである。

刊行主体 財團法人 松山市生涯学習振興財團

理 事 長 田中誠一

事務局長 一色正士

埋蔵文化財センター 所 長 河口雄三

次 長 田所延行

調査係長 田城武志

調査主任 栗田正芳（文化教育課職員）

担 当 調査員 栗田茂敏

4. 使用した方位は、すべて磁北である。

5. 遺物の実測・製図は栗田茂敏、丹生谷道代、新出寿美子が行い、遺構の製図は高尾和長、丹生谷道代、新出寿美子が行った。

6. 写真は遺構を栗田茂敏が、遺物を大西朋子が撮影した。

7. 本書にかかるる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。

8. 本書の執筆・編集は栗田茂敏が行った。

本文目次

I 調査に至る経緯と組織	1
II 環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III 造構と遺物	7
1. 壊穴住居・掘立柱建物	8
2. 溝・櫛列・段状造構	40
3. 土壙・柱穴	49
4. 包含層出土の遺物	53
IV まとめ	59

図目次

図1 調査地と既往の発掘区	2
図2 調査地周辺の遺跡	4
図3 遺構配置図	7
図4 壊穴住居SB-1	8
図5 SB-1出土遺物	9
図6 壊穴住居SB-2	10
図7 SB-2出土遺物	11
図8 壊穴住居SB-3	12
図9 SB-3出土遺物(1)	12
図10 SB-3出土遺物(2)	13
図11 壊穴住居SB-4	14
図12 SB-4出土遺物	14
図13 壊穴住居SB-5	15
図14 SB-5出土遺物	15
図15 壊穴住居SB-6	15
図16 SB-6出土遺物	16
図17 壊穴住居SB-7	16
図18 SB-7出土遺物	17
図19 壊穴住居SB-8	19
図20 SB-8出土遺物(1)	21

図21	S B—8 出土遺物（2）	22
図22	S B—8 出土遺物（3）	23
図23	S B—8 出土遺物（4）	24
図24	S B—8 出土遺物（5）	25
図25	竪穴住居 S B—9	26
図26	竪穴住居 S B—10	26
図27	S B—10出土遺物	26
図28	竪穴住居 S B—11	27
図29	竪穴住居 S B—12	27
図30	S B—12出土遺物	28
図31	竪穴住居 S B—13	29
図32	S B—13出土遺物	30
図33	竪穴住居 S B—14	31
図34	S B—14出土遺物（1）	31
図35	S B—14出土遺物（2）	32
図36	竪穴住居 S B—15	32
図37	S B—15出土遺物	33
図38	掘立柱建物 S B—16	33
図39	S B—16出土遺物	34
図40	竪穴住居 S B—17	34
図41	S B—17出土遺物	35
図42	掘立柱建物 S B—18	37
図43	S B—18出土遺物	39
図44	溝 S D—1	40
図45	溝 S D—2、柵列 S A—5	40
図46	溝 S D—6、柵列 S A—1・2・4	41
図47	溝 S D—3・4、柵列 S A—5～7	42
図48	柵列 S A—3	42
図49	溝 S D—9、段状遺構 S X—3	43
図50	柵列 S A—8～10	43
図51	溝 S D—5、段状遺構 S X—1	44
図52	S D—2出土遺物	45
図53	S D—3出土遺物	45
図54	S D—5出土遺物	46
図55	S D—7出土遺物	46
図56	S D—9出土遺物	47
図57	S X—2出土遺物	48
図58	S X—3出土遺物	48

図59	S A-2 出土遺物	49
図60	S A-4 出土遺物	49
図61	土壤S K-2	49
図62	S K-2 出土遺物	50
図63	土壤S K-5	50
図64	S K-5 出土遺物	50
図65	柱穴出土遺物（1）	51
図66	柱穴出土遺物（2）	52
図67	柱穴出土遺物（3）	53
図68	包含層出土遺物（1）	54
図69	包含層出土遺物（2）	55
図70	包含層出土遺物（3）	56
図71	包含層出土遺物（4）	57

図 版 目 次

図版1	大峰ヶ台丘陵遠景（南より）	調査地伐採前の状況（北西より）
図版2	遺跡より松山平野東部を望む（西より）	調査地全景（北より）
図版3	S B-1（南東より）	S B-2（南東より）
図版4	調査地中央部の遺構（東より）	調査地南部の遺構（西より）
図版5	調査地北東部の遺構（西南より）	S B-7とS X-1（東より）
図版6	S B-8（北東より）	S B-8（南より）
図版7	S B-18周辺の遺構（西より）	S B-18（北東より）
図版8	S B-16（北より）	S D-3とS A-6（東南より）
図版9	S A-8~10（南西より） S X-3とS D-9（北東より）	S B-3 遺物出土状況 S D-9 遺物出土状況 S B-14 遺物出土状況
図版10	S B-2 出土遺物	
図版11	S B-3 出土遺物（1）	
図版12	S B-3 出土遺物（2）	
図版13	S B-6・7 出土遺物	
図版14	S B-8 出土遺物（1）	
図版15	S B-8 出土遺物（2）	
図版16	S B-12出土遺物	S B-13出土遺物
図版17	S B-14・16出土遺物	
図版18	S B-18出土遺物	
図版19	S D-3 出土遺物 S X-3 出土遺物	S D-9 出土遺物 S A-2 出土遺物

- 图版20 柱穴出土遗物
图版21 包含层出土遗物（1）
图版22 包含层出土遗物（2）

I 調査に至る経緯と組織

松山市西部に所在する独立丘陵、大峰ヶ台は弥生時代の遺構・遺物や、多くの古墳が分布することで古くから知られ、この丘陵全体が松山市の指定する包蔵地のうちの、No32・33「大峰ヶ台弥生遺跡・大峰ヶ台古墳群」という周知の遺跡となっている。本調査区の東に隣接する区域は1974（昭和49）年に松山市教育委員会（以下、市教委）によって調査が行われ、弥生時代の住居址、土塙等が検出されている。松山市は、この丘陵を拠点とした総合公園整備を計画、これを受けた市教委は1984（昭和59）年より分布調査・試掘調査を行った。これらの調査結果は、保存のための計画変更等、整備計画にも少なからず反映された。しかし、やむを得ず失われる遺跡については、緊急調査による記録保存で対処することとなり、本書で報告される丘陵頂部周辺も、中心施設となる展望台建設のため、この対象となった。この丘陵上における調査は、先述の1974年の調査、1984年の分布・試掘調査を含めると、本調査をもって通算4次を数えることになる。これらの調査時点では、調査次数について特段考慮されることはなかったが、その後も断続的に丘陵上の調査が実施され、遺跡名・調査名等に若干の混乱を生じている。したがって、本報告を機会に、丘陵上の遺跡については遺跡名を「大峰ヶ台遺跡」に統一し、それぞれの調査に次数を付することにし、既に通用しているいくつかの遺跡名・調査名にかぶせていくことにしたい。よって、1974年の調査を1次、1984年の分布調査を2次、3次調査には丘陵南西部の客谷地区で実施されたA地区古墳群の調査をこれにあて、本調査を4次調査とした。

調査地は、海拔133mの丘陵頂部を5m程度南に下ったあたりから南斜面にひろがっており、調査対象は切り土の及ぶ海拔120mラインまでの約1,500m²の範囲となった。試掘調査では弥生中期の遺構・遺物が検出されている。遺跡は本米、頂上部までひろがっていたものと考えられるが、第二次大戦中の高射砲跡や塹壕によって既に破壊されている。

調査は、市教委が主体となり、1987（昭和62）年11月4日から翌1988（昭和63）年5月12日までの約7カ月間を屋外調査期間として下記の組織で実施した。

調査主体 松山市教育委員会

教育長（前任） 西原 多喜男

教育長 平井 龟雄

参事（前任） 松原 重雄

教育次長 井出 治巳

教育次長 古本 克

文化教育課

課長（前任） 伊賀 俊輔

課長 渡部 忠平

課長補佐 大野 衡治

第二係長（前任） 戸田 浩

第二係長 曾野 治之

主任 西尾 幸則

主事 重松 佳久

調査担当 調査員 栗田 茂敏

調査地 松山市南江戸5丁目1586番地6

調查面積 1,500m²

調査期間 1987(昭和62)年11月4日～1988(昭和63)年5月12日



図1 調査地と既往の発掘区

II 環 境

1. 地理的環境

松山平野は、その北東部を高繩山系南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。調査地の所在する大峰ヶ台丘陵は平野の西部にあって、西方の伊予灘に開ける海岸線から約3.5km、北方の畜灘の海岸線から約7kmに位置する独立丘陵である。平野は、現在平野を西流する2大河川、石手川・重信川の沖積作用によって形成されたものであるが、丘陵東・南麓にはこのうちの北方の河川、石手川の支流、宮前川が流れている。

海拔133mを測る丘陵頂部からの眺望は当平野の独立丘陵中でも随一で、南西は伊予市、北は北条市の海岸線までを一望でき、沖合いに浮かぶ瀬戸内の島々も手にするが如く望むことができる。また、平野部に眼を転じれば、はるか東方の石鎧連山を背景に、松山平野の隅々までを見渡すことができる。周辺平野部の標高が8~12mということであるから、丘陵頂部周辺との間には約120m程度の比高差があることになる。

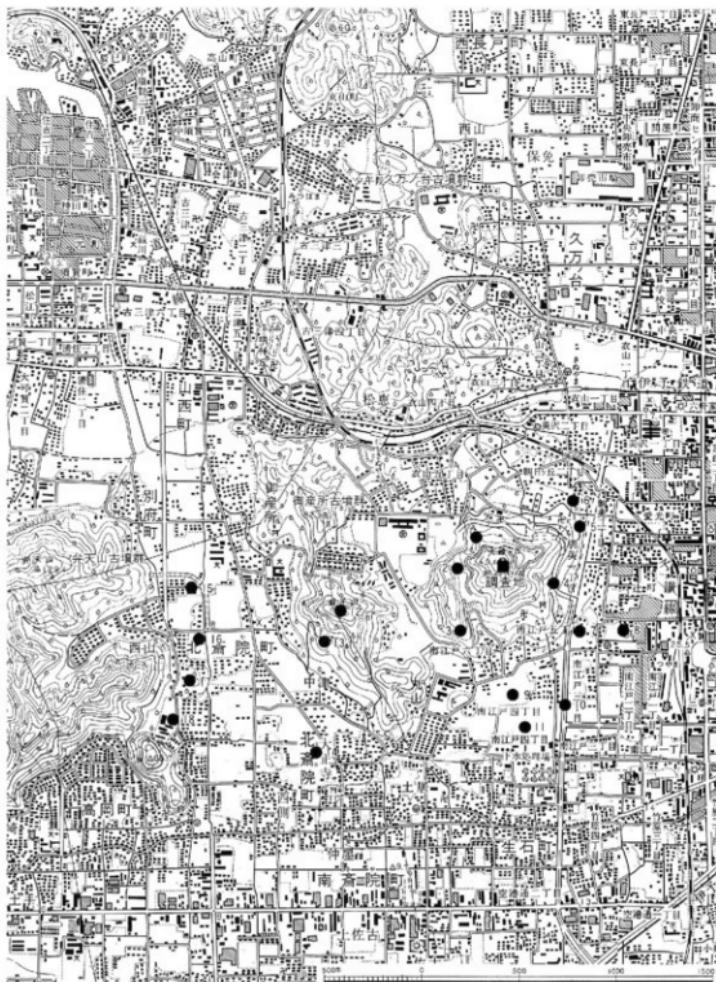
2. 歴史的環境

ここでは、遺跡の所在する大峰ヶ台丘陵上、および周辺平野部の遺跡分布等を概観していくことにする。古くから、丘陵上には、弥生時代以降の各期の遺跡が存在することが知られているが、これを遡る時期の遺構・遺物の検出例はみられていない。

純文時代の遺物は、丘陵南麓直近にあって、古墳時代前期の井堰の出土で知られ、断続的に10次までの調査が行われている古墳遺跡の井堰を覆う洪沢砂礫層中から、後期を中心として前期末~晩期の土器片の出土がみられているが、これらの遺物は石手川旧流路の氾濫に伴うものであって、該期の遺構に伴うものではない¹⁾。また、丘陵北東麓の朝美澤遺跡2次調査包含層中から少量の後期土器片が出土している²⁾。

弥生時代になると、調査地の所在する丘陵一帯や周辺部の微高地上で、遺構・遺物の出土がみられるようになってくる。本書で報告されるように、丘陵上や裾部では中~後期のものが主体となっており、前期の遺跡は周辺の微高地上に分布している。これら前期の遺跡の中でも、最も遡るのは、前述の朝美澤遺跡2次調査地第3層出土の板付IIa式併行期の遺物群で、現在のところ松山平野の弥生時代のものとしては最古段階の遺物を出土する遺跡のひとつに数えられる。また、調査地の1.7km西南方、弁天山丘陵東麓の斎院鳥山遺跡の環濠と考えられる溝状遺構からは、前期末の一括遺物の出土をみている³⁾。さらに、この斎院鳥山遺跡の北方0.6kmの宮前川遺跡別府地区の調査では、包含層遺物として多量の前期末~中期初頭の遺物が出土している⁴⁾。中期中葉では、本調査に引き続いて行われた丘陵東麓の辻遺跡⁵⁾や、さらに東方の松山東部環状線に伴う大峰ヶ台II遺跡⁶⁾の調査での包含層遺物として出土しているが、遺構を伴ってまとまった遺物の出土をみたのは本調査が唯一の例となっている。なお、これに続く中期後葉、凹線文盛行期の遺跡はこの地域では未だ確認されていない。

後期になると遺跡数は増え、辻遺跡では丘陵鞍部に投棄された状況で、器台を多く含む後期中葉の土器群が出土⁷⁾、澤遺跡1次調査では3基の壺棺墓が検出されている⁸⁾。斎院鳥山遺跡の南方1kmの津田鳥越遺跡の1~3次調査では、土築や石築を多数伴った後期後半の火災住居の検出をはじめとして、



- | | | | |
|------------|---------------|------------|-------------|
| 1 朝日谷古墳 | 6 朝美澤道路 2 次調査 | 11 古照遼跡 | 16 宮前川北斎院遠跡 |
| 2 客谷B地区古墳群 | 7 南江戸森田遠跡 | 12 岩子山古墳 | 17 斎院鳥山遠跡 |
| 3 客谷A地区古墳群 | 8 江町遠跡 | 13 斎院茶臼山古墳 | 18 津田鳥越遠跡 |
| 4 朝美辻遠跡 | 9 南江戸園日遠跡 | 14 北斎院地内遠跡 | |
| 5 朝美澤遠跡 | 10 松縄古黒道跡 | 15 宮前川別府遠跡 | |

図2 調査地周辺の遺跡

多量の土器群が出土している¹⁰⁾。また、宮前川遺跡¹⁰⁾は、古墳時代前期初頭を主とした集落・祭祀遺跡であるが、この遺跡でも多量の弥生時代後期後半～宋の遺物群が包含層遺物として出土している。その他、大峰ヶ台丘陵東麓、宮前川畔の朝美遺跡では、高床倉庫の部材の一部であるネズミガエシの出土がみられている¹¹⁾。

古墳は、調査地の所在する大峰ヶ台をはじめとして、周辺の岩子山、弁天山等の丘陵上に多く分布している。まず、大峰ヶ台丘陵北西面には、前期の前方後円墳朝日谷2号墳¹²⁾があり、主体部粘土床上から2面の舶載鏡、40本を越える銅鏡、鉄鏡や、鉄劍、ガラス玉等を出土している。その他、この丘陵には、横穴式石室を主体部に持つ後期古墳が多く分布しており、これらのうち朝日谷1号墳¹³⁾や、丘陵南麓の客谷古墳群¹⁴⁾等の6世紀後半を主体とした円墳の調査がなされている。斎院茶臼山古墳¹⁵⁾は岩子山丘陵西面に所在する6世紀前葉の円墳で、松山平野の横穴式石室を主体部とする古墳としては、最も古い時期に属する。石室は全壇に近い状態の遺存ではあったが、馬具、鉄鏡、等の鉄製品類、玉類を比較的多く出土している。また周溝から円筒・朝顔型埴輪の出土をみている。また、同じ丘陵上、斎院茶臼山古墳の東部尾根上に展開する岩子山古墳群中の1基、岩子山古墳¹⁶⁾では1950年代に調査が行われ、人物・馬型埴輪等の形象埴輪が採集されており、6世紀初頭のものとされているが、不明な部分が多い。

これらの古墳が分布する大峰ヶ台・岩子山丘陵南方の低地部には、古墳時代前期の大規模な灌溉用井堰3基の出土で知られる古照遺跡がある。4世紀後半の大規模な土木工事の発見で注目されたのは勿論のこと、堰を構成する1000余本の杭等の部材のなかには、高床倉庫の建築部材を転用したものが含まれ、建物の復元にもおおいに貢献した遺跡である。しかしながら、これらの井堰・取水口等の遺構の検出にもかかわらず、これに直接かかわる該期の水田は未検出であり、課題となっている。

近年、調査地周辺の平野部では、古代～中・近世の遺構・遺物の検出例が増加している。松山西部環状線建設にともなう調査が、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センターによって、1985年度から1994年度にかけて実施されたが、このうち1988年度に実施された大峰ヶ台丘陵北東麓部の調査によって平安時代の寺跡の一部が検出され、澤磨寺と命名された。また、中世の水田址、集落・墓等が、この一連の調査¹⁷⁾や、南江戸園目遺跡¹⁸⁾、古黒遺跡上層部において多量の土師器・瓦器・須恵器とともに出土しており、これらの遺物は松山平野の中世土器編年史の基準資料となっている¹⁹⁾。

近世の遺構では、墓を主体に調査が行われている。調査地東南麓の南江戸桑田遺跡²⁰⁾は、近世墓地で、11基の桶形墓、1基の箱形墓や、その他土壙墓の検出をみている。調査地西南1.5kmの水田地で調査された北斎院地内遺跡でも15-16世紀の墓や掘立柱建物を中心とした遺構群が検出され、4期にわたる墓落内での墓域、生活域といった集落変遷の一端が窺える資料として評価されている²¹⁾。

註

1.)『古照遺跡』 松山市教育委員会 1974

『古照遺跡II』 松山市教育委員会 1976

栗田正芳・河野史知 ほか『古照遺跡－第6次調査－』 松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993

栗田正芳『古照遺跡－第7次調査－』 松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994

- 2) 梅木謙一・宮内慎一 ほか 「朝美澤遺跡－2次調査－」『朝美澤遺跡・辻町遺跡』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1992
- 3) 梅木謙一 ほか 「斎院烏山遺跡」「斎院の遺跡」松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1994
- 4) 「宮前川遺跡」愛媛県埋蔵文化財調査センター 1987
- 5) 萩田茂敏 「辻遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会 1989
- 6) 岡田敏彦 「一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書I—大峰ヶ台地区—」愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994
- 7) 前掲註5) 文獻
- 8) 松村 淳・栗田茂敏 「澤遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会 1989
- 9) 森 光晴「鳥越遺跡」「愛媛県史 資料編 考古」愛媛県史編さん委員会 1986
- 10) 前掲註4) 文獻
- 11) 「大峰ヶ台の高地性住居址」『松山市史料集 第一巻 考古編』松山市 1980
- 12) 梅木謙一「朝日谷古墳」「斎灘・燧灘の考古学」大西町 1993
- 13) 松村 淳 ほか 「朝日谷1号墳」「大峰ヶ台丘陵の遺跡」松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1994
- 14) 宮崎泰好 「大峰ヶ台客谷地区古墳群」『松山市埋蔵文化財調査年報I』松山市教育委員会 1987
松村 淳 ほか 「客谷古墳群B地区」「大峰ヶ台丘陵の遺跡」松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1994
- 15) 西尾幸則 「斎院茶臼山古墳」松山市教育委員会 1983
- 16) 名木二六雄 「岩子山古墳」松山市教育委員会 1975
- 17) 前掲註6) 文獻
- 岡田敏彦 「一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書I—松塙古墳遺跡—」愛媛県埋蔵文化財調査センター 1993
- 18) 上田 真 「南江戸闕門遺跡」松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1991
- 19) 中野良一 「愛媛県における古代末から中世の土器様相」「中近世土器の基礎研究IV」 1988
宮本一夫 「道後平野における13から15世紀の中世土器」「鷹子・梅味遺跡の調査」愛媛大学埋蔵文化財調査室 1989
- 栗田茂敏 「松山平野における古代後期から中世の土器」「石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡第2次調査」松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1994
- 栗田正芳 「道後平野における回転台土器について」「中近世土器の基礎研究X」 1994
- 20) 重松作久・丹下道一 「南江戸桑田遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報II」松山市教育委員会 1989
- 21) 武正良浩 「北斎院地内遺跡1・2次調査地」「斎院の遺跡」松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1994

III 遺構と遺物

検出された遺構には、竪穴住居址16棟、掘立柱建物2棟、柵列10基、溝状遺構9条、その他段状遺構・土壤・柱穴などがある。竪穴住居址のうち、2棟が円形で大型のもの、その他は隅丸方形ないしは長方形の小型のものである。また、柵列や溝は斜面に對して直交するようなかたちで設営されている。柵列は、概ね長さ5m前後の短いもので、4~5本の柱列で構成されるものと、細い杭列のようなもので構成されるものがある。出土した遺物は、包含層中に僅かに縄文色の強い石器が混在するものの、包含層・遺構内とともに圧倒的に弥生時代中期の遺物が多く、また、そのほとんどが中期中葉のという短い時間幅の中におさまるものである。したがって、以下に述べる遺構は、すべて弥生時代中期中葉のものと考えてよい。



図3 遺構配置図

1. 積穴住居・掘立柱建物

S B - 1 (図 4)

調査区西部で検出された隅丸長方形の住居で、斜面上方部での立ち上がり40cmの遺存で、斜面下方部分では、その立ち上がりを失っている。短辺長2m、長辺の長さ2.5m程度の規模である。幅10~20cmの周壁溝を伴っている。

S B - 1 出土遺物 (図 5)

甕 (1~4) 口頭部片4点の出土がみられている。1は復元口径27.6cmを測るもので、端部を面取りし、内傾する直口縁を2.5cm程度下った位置に、比較的高い断面方形の刻み目突帯を貼り付けられてされている。3・4は断面三角形の貼り付け口縁を持ち、その直下の頭部に圧痕文突帯が巡るもので、水平またはこれに近い口縁上面と内上面縁を描むように横挽でするため、内面に浅い窪みが巡っている。4は折り曲げによる口縁部を持つ。復元口径は、いちおう3で25.3cm、4で21.7cmとなっているが、小破片からの復元であるため若干正確さを欠く。

高环 (5) 高环の口縁部片で、復元口径24.3cmを測る。上端が水平な断面三角形状の口縁外端面に刻み目を施されている。

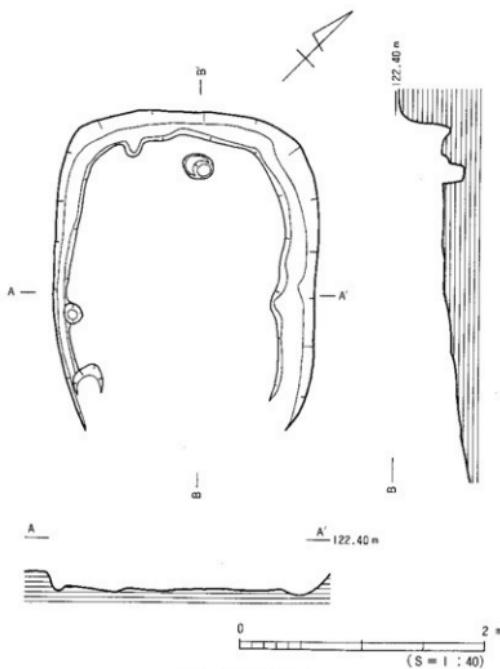


図4 積穴住居 SB-1

鉢（6） 直口の鉢片で、半円状の把手を持ついわゆるジョッキ形土器の口縁部になるものと思われる。口縁部周縁内外面を横撫でされるほかは、内外面ともに縱方向に磨かれている。

壺（7・8） ともに壺の底部片、7は径6cmの僅かな底み底の小型品である。

石斧（9） 緑色片岩を素材とする、扁平片刃の加工斧片。

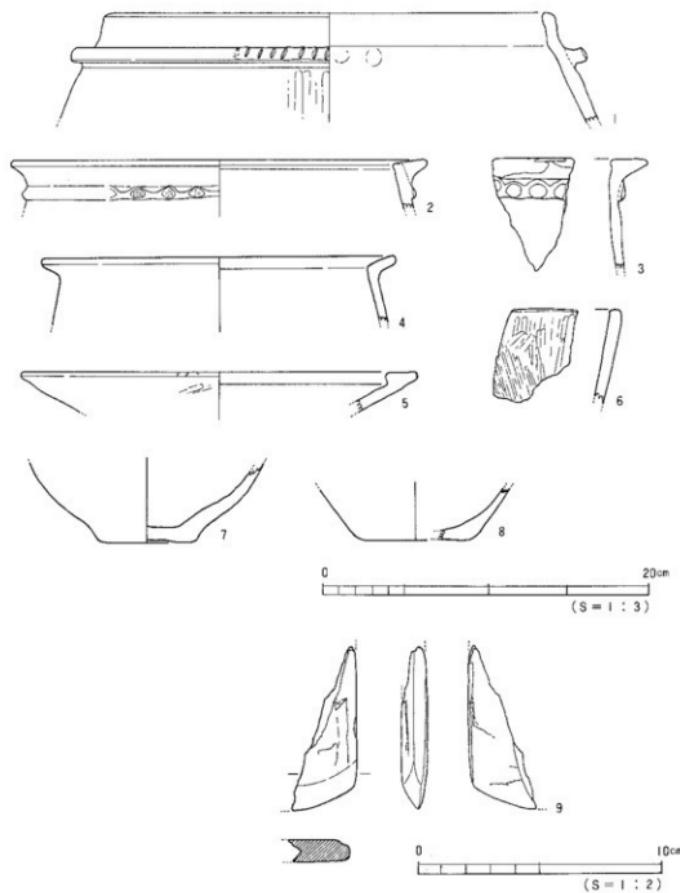


図5 SB-1出土遺物

S B - 2 (図 6)

S B - 1 の南西 3 m の位置で検出された住居址で、斜面上方部での立ち上がり 40cm の遺存で、斜面下方の立ち上がりは遺存していない。図で示された斜面下方部のプランは、覆土の遺存する範囲であり、現況では長径 3 m、短径 2 m の不整橿円形のようなプランを呈しているが、本来隅丸方形の形状をなしていたものと考えられる。床面中央部の柱穴以外は、すべてこの住居址を切っている。

S B - 2 出土遺物 (図 7)

甕 (10~14) 口頭部には、貼り付けによる口縁部と頸部圧痕文突帯を持つ大型の 10・11 と、小型で折り曲げによる口縁部を持つ 12 がある。復元口径 23.9cm を測る 11 の口端上面が水平になり、外端面に刻みを施されるのにに対して、口径 34cm の 10 は若干内側に傾いた面をなし、刻みを持たない。12 は復元口径 16.8cm、比較的長い口縁部は水平に近く折り曲げられ、端部を丸くおさめる。頸部内面には指頭圧痕が顕著に残っている。底部には平底の 13 と、くびれの上部底の 14 がある。

壺 (15~17) 口頭部片 15 は口径 20.9cm、口端部を僅かに下方に拡張している。外面は斜め方向に粗く搔きこった後、軽く横撫され、内面は端部周縁を横撫するほかは、横方向に磨かれている。底部 16 は僅かな凹底、17 は平底で、外面を縱方向に磨かれている。

高环 (18) 口端部を内外方、特に内側に拡張する環部片、外面を縱方向に磨かれている。

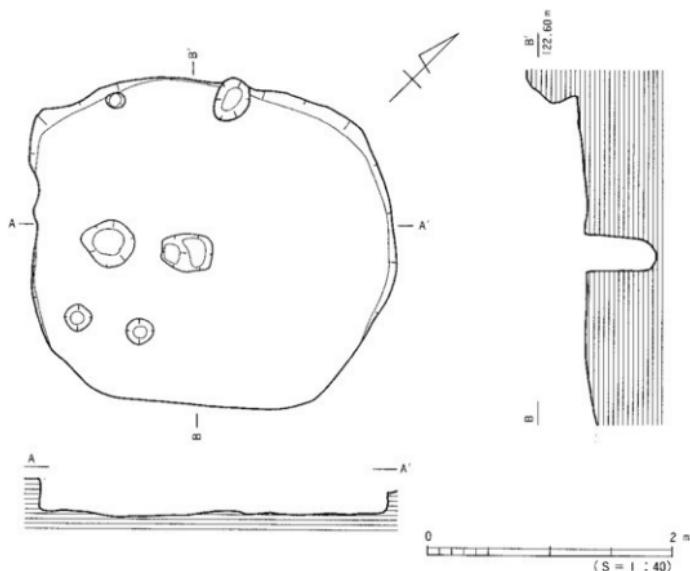


図 6 整穴住居 SB - 2

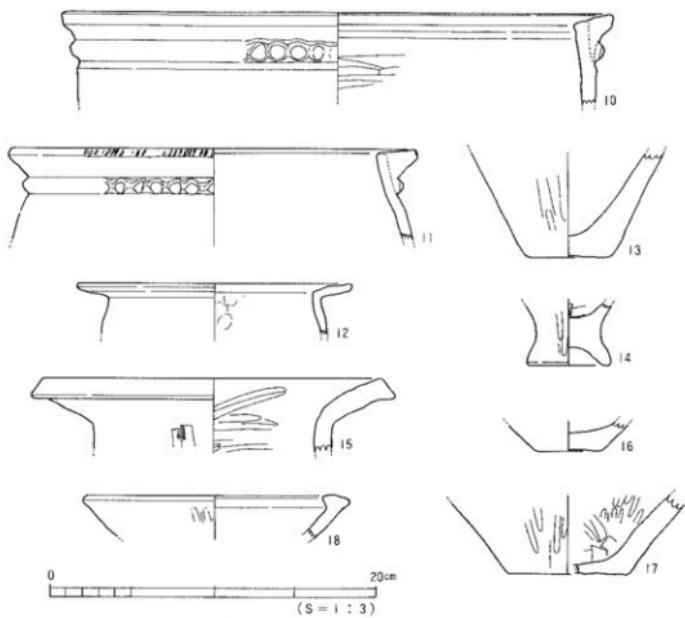


図7 SB-2出土遺物

S B - 3 (図8)

調査区の中央付近で、種々の遺構と切りあつて検出された隅丸方形住居址で、 3×2 mの遺存である。切りあう遺構は、SB-6・SD-2~4・SA-5であるが、SD-3以外のすべてをこの住居址が切っている。床面南東部で遺物が集中して出土した。

S B - 3 出土遺物 (図9・10)

甕 (19・20) 19は口縁部貼り付けで、口端部に刻み目、頸部に圧痕文突帯を持つ。器表面の荒れが甚だしいが、胴部外面に斜め方向の磨きの痕跡が一部僅かに見てとれる。口径29.8cm、胴部上位で最大径28.2cmを測る。20は、口径23.8cmの口縁部折り曲げによる甕で、水平よりやや斜め上方に屈曲した口縁部は、端部を丸くおさめている。胴部外面に煤の付着がみられる。

壺 (21~24) 復元完形品24と、口縁部・頸部の片21~23がある。21は、下垂口縁の小片。斜め下方に拡張した口端部外面のヘラ状工具による施文は、山形文になるものと思われる。2個の円形浮文が貼り付けられた22の内面には、磨きと刷毛目、外面には斜め方向の刷毛目が観察できる。23は多重の断面三角形突帯を持つ頸部片である。器高41.6cmの復元完形品24は、胴部中位に張りを持ち、胴部最大径31.6cmを測る。断面三角形の突帯が貼られた短い頸部から開いた径22.7cmの口縁部は、その端部を上下方に拡張し、この拡張した口縁面や、口縁部内面に3本単位の櫛歯状工具による波状文を施

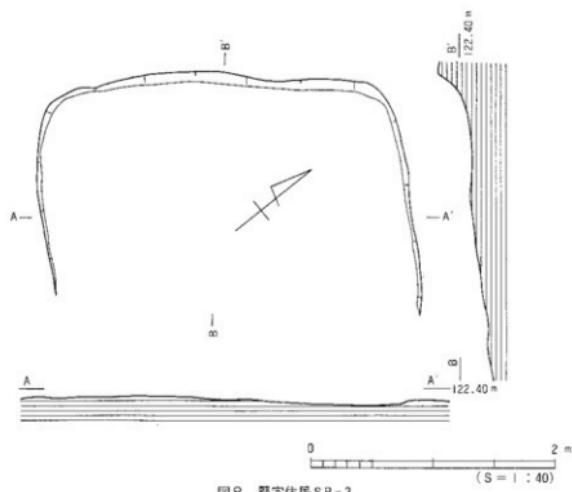


図8 整穴住居SB-3

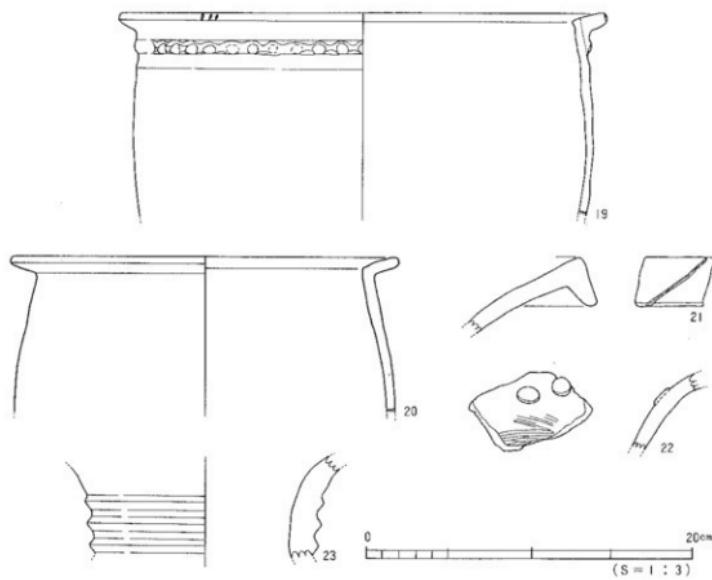


図9 SB-3出土遺物(1)

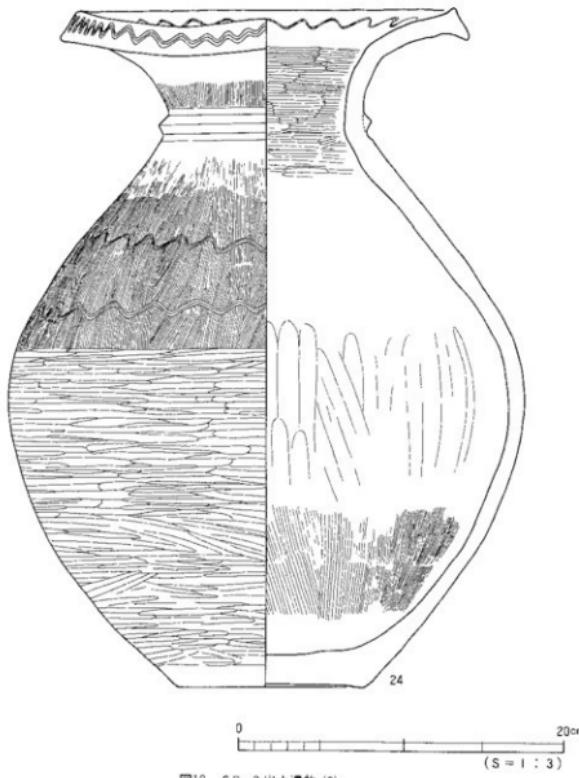


図10 SB-3出土遺物(2)

される。また、胴部上位にも同様の施文が2段にわたって巡っている。剥部外面中位以下には横ヘラ磨き、これ以上の部位から頭部を縦刷毛目と調整を使い分け、ある種装飾的な効果を挙げている。口縁部の周縁は内外面ともに横拂で、内面の頸部は細かく横ヘラ磨きされる。また、胴部内面は底部付近に縦刷毛目がみられるほかは、縦方向の指拂でが胴部中位以下に顕著である。

S B - 4 (図11)

S B - 3 の南方に近接して検出された隅丸方形プランの住居址で、南東半を搅乱されている。2.2×1 m の遺存である。

S B - 4 出土遺物 (図12)

甕(25) 内傾する頸部に水平口縁を持つ甕片で、頸部に2条の突帯が巡る。このうち上位のもの

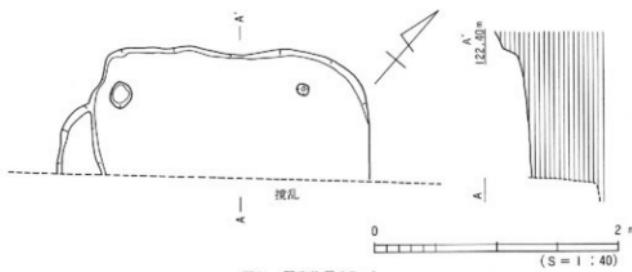


図11 整穴住居 SB-4

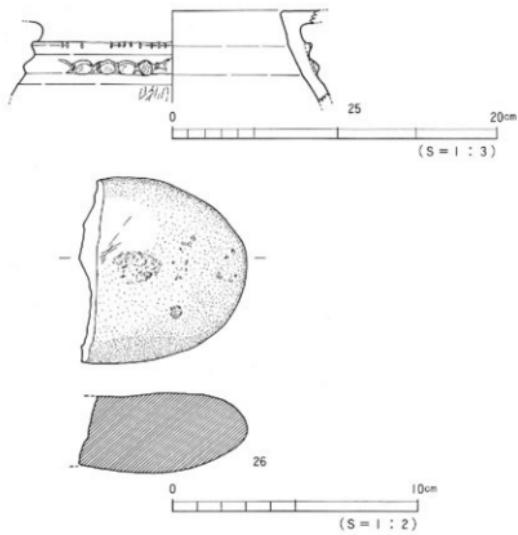


図12 SB-4 出土遺物

にはヘラ状工具による鋭い刻みが、下位のものには布目を持つ圧痕による大きな刻みが施されている。
砥石（26） 細粒砂岩の扁平な円盤の片面を砥面として使用している。

SB-5 (図13)

SB-4 の西方 1 m に位置する隅丸方形住居址で、これもやはり斜面上方部のみ、 2×1 m の遺存である。床面で、柱穴が何基か検出されているが、この住居との関係は不詳である。

S B - 5 出土遺物 (図14)

甕 (27) 口頸部の片、復元口径27.3 cmを測る。水平に近く屈曲する短い口縁部は、貼り付けによるものと思われ、端部を丸くおさめられている。頸部には圧痕文帯が1条巡る。

鉢 (28) ジョッキ形土器の底部、比較的薄い平底から内傾しながら体部が立ち上がる。

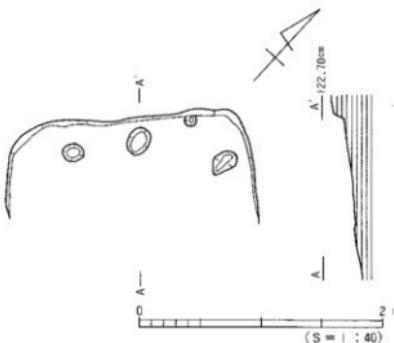


図13 整穴住居 SB-5

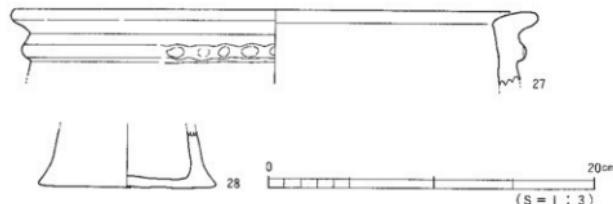


図14 SB-5 出土遺物

S B - 6 (図15)

S B - 3 、 S D - 3 に切られる隅丸方形住居址で、 S D - 2 + 4 、 S A - 5 を切っている。

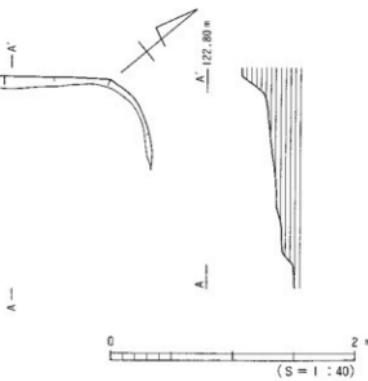


図15 整穴住居 SB-6

SB-6 出土遺物 (図16)

甕(29・30) 貼り付け口縁と、頸部に压痕文突帯を持つ口頸部片2点の出土がある。29は口径27cm、面取りした口端面に刻みを持つ。口縁部貼り付けの際に内面上端部を強く横撫でされたため、口縁部が内方に突出するような結果となっている。また、突帯下端も強く横撫され、余分な粘土が段のように盛り上がっている。口径33.7cmの30は、口縁部・突帯を同一の粘土帯で成形しており、口縁部には刻みを持たず丸くおさめている。

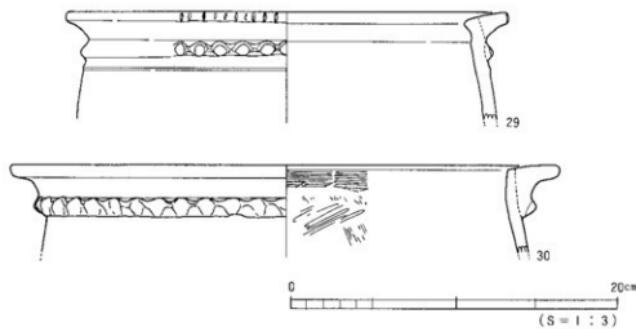


図16 SB-6 出土遺物

SB-7 (図17)

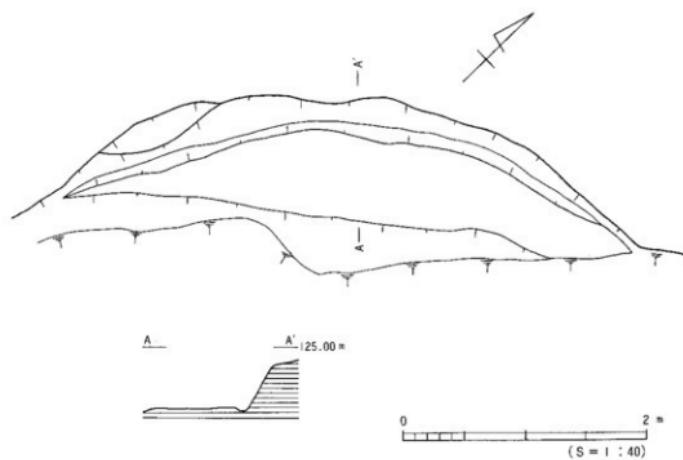


図17 整穴住居SB-7

調査区北東隅検出の円形住居址で、溝 S D—5・段状造構 S X—2に切られており、ごく一部しか残存しておらず、柱穴も検出されていないが、立ち上がりの直下に周壁溝と考えられる構が巡っており、円形住居址と判断した。この判断が正しいとすれば、後述の円形住居 S B—8と同程度の規模の住居ということになる。

S B—7 出土遺物（図18）

敲石（31） 断面横円形の砂岩の円礫の両平坦面、および側端部の4箇所に敲打痕が認められる。重量710 gを量る。

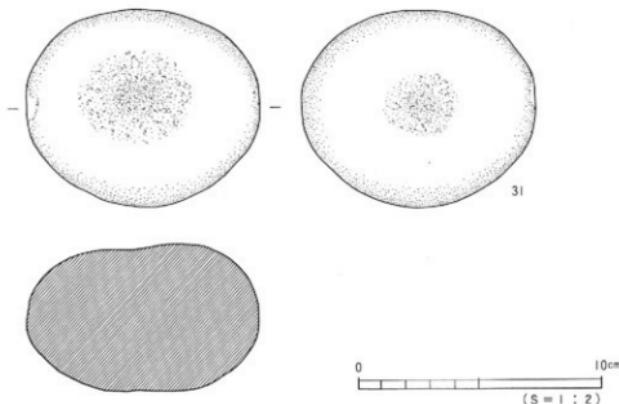


図18 SB-7出土遺物

S B—8（図19）

調査区南部で検出された円形住居址で、直径6.5mを測る。斜面下方部の半分を失っており、半月形の検出プランである。最も遺存の良好な斜面上方部で0.8mの立ち上がりで、周壁溝を伴う。この周壁溝は、斜面最高所の立ち上がり直下の部分で約1mの間隔を持って途切れ、この部分は緩やかなテラス状に地山が削り出されており、入り口部分に相当する施設であるかもしれない。図示した4本の柱穴がこの住居に伴うものと思われ、本来6本柱穴の住居であったものと考えられる。中央の窪みやその周辺に焼土がひろがり、これらの窪みが炉であったものと判断される。本調査において、最もまとめた遺物を出土した造構である。

S B—8 出土遺物（図20~24）

甕（32~43） 頸部に圧痕文や、刻み目を施した突帯を持つもの32~37と、持たない38・39がある。突帯を持つもののうち、35は口縁部折り曲げで、また、36も折り曲げによるものと思われる。その他のものは貼り付けによっており、33や37では口縁部と突帯とを同一の粘土帯で成形していることが観察できる。37の突帯は突帯というよりもむしろ段に近いもので、段の下方に押し上げるような圧痕を施している。口端部に刻みを持つものには、端部全面を刻まれる32・37と、下半のみに刻みが施され

る33とがみられる。突帯を持たないもののうち39は小型でやや粗製の印象を受けるもので、口縁部折り曲げによっているが、38の口縁部については折り曲げ、貼り付けの判別がつかない。

底部にはやや突出した平底の40、くびれを持つ上げ底の41・42、くびれを持たない窪み底の43がある。

壺（44~64） 壺には、口端部を上下方、特に下方に拡張し、端面にヘラ彫きによる施文を持ち、頸部や胴部、口縁部内面を貼り付け突帯や浮文で飾られるものが多い。44の口端部施文は3条の凹線文、口縁部内面には断面三角形突帯による溝文が貼り付けられている。その他の口端面施文には45、49のような山形文、46~48にみられる斜格子文がある。頸部には、49~51のような多重の断面三角形突帯と52・53の1条の压痕文突帯がみられる。54は、内面に円形浮文を持つ口縁部片、55は胴部片で2条の刻み目突帯が巡っている。

底部には平底と僅かな窪み底になるものとがある。

高坏（65~73） 高坏の口縁部形態には大きく3形態のものがある。65~68・70のように口端部を内外方、特に内方に拡張し、上端に水平な面を持つものがそのひとつである。このうち66・68には、口縁部外端面に刻みを施されている。68についてはジョッキ形土器、もしくは鉢形土器の口縁部になるかもしれない。その他には、69のように袋と同様の折り曲げによる口縁部形態をなすもの、また、71のような外方への張り出しが大きく、内方の突出部が立ち上がりのようになるものがある。また、これら高坏の口縁部には焼成前の穿孔が施される例が多いのも特徴的である。

脚部は低脚の72と、これよりも高く大型の73とがあるが、いずれも施文を持たない。

鉢（74・75） 2点のいずれもジョッキ形土器で、74は把手部分の片、75は底部の小破片である。

石斧（76・77・79） いずれも緑色片岩を素材とする磨製石斧である。76は刃部付近の小破片のため全容は窺い難い。77は長さ6cm、幅2.8cm、最大厚0.6cmの扁刃片刃の加工斧で、刃部の一部と基端部の一部を僅かに欠く。扁平な礫の側縁部と刃付けが大きく行われる側の面のみを入念に研磨し、他方の面は刃部付近のみを磨いている。現況重量18.4gを量る。79は平面形が短冊形をなすと考えられる破損品で、木面の一箇所でまとまつた破片として出土し、図のように接合された。幅7.3cm、厚さ1.7cmと比較的大型のものであるが、これも刃付けが一方に偏っている。77と同様、片面のみを入念に研磨されている。

擦り石（78） 砂岩製の破損品。

石核（80） 不定形な安山岩の石核。

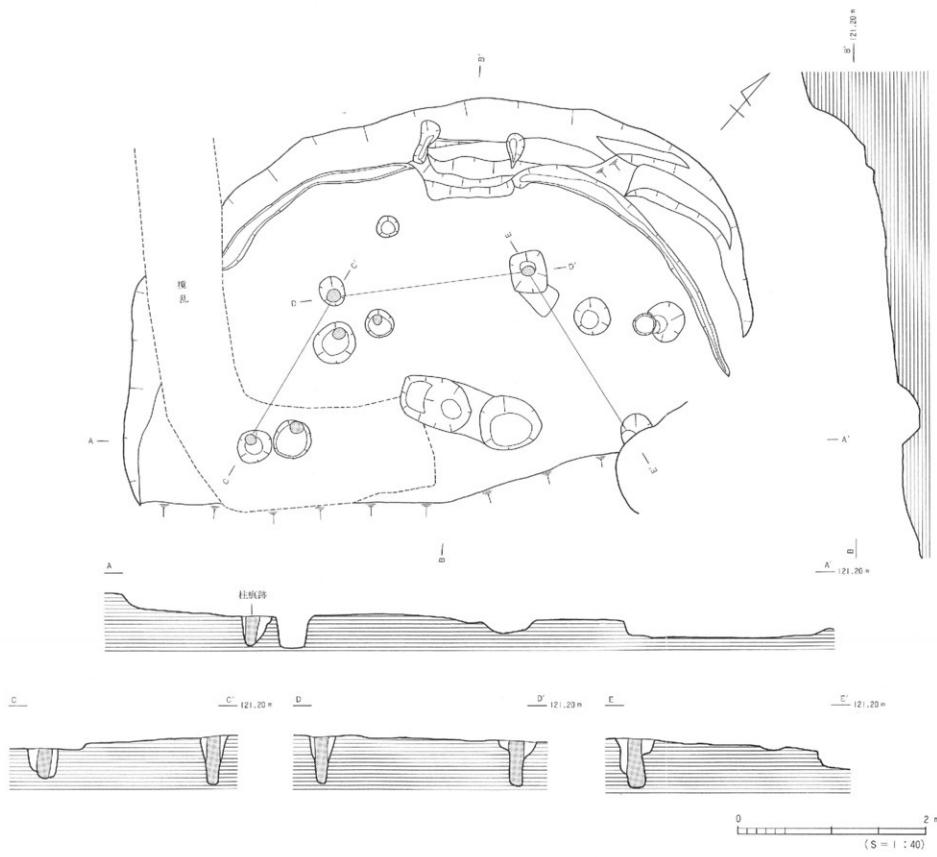


图19 整穴住居SB-8

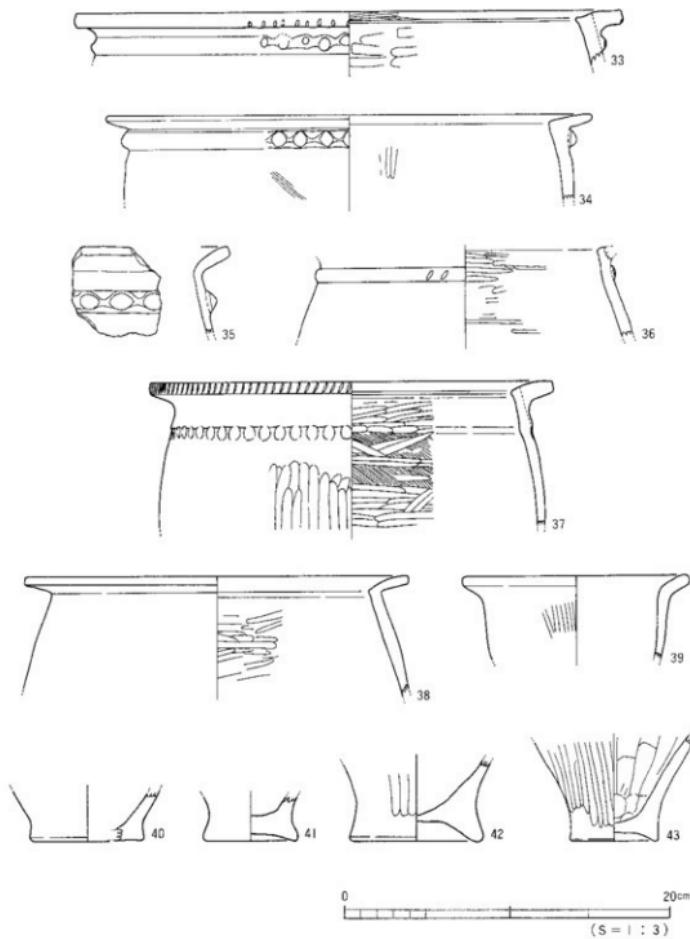


図20 SB-8 出土遺物 (i)

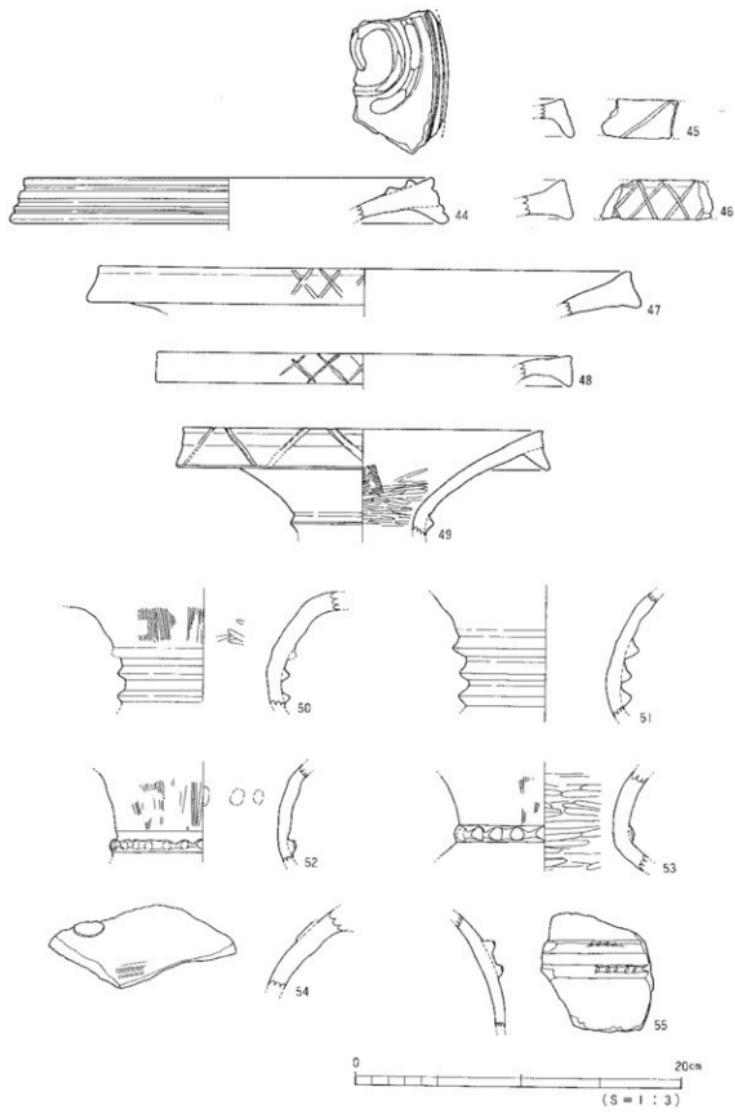


图21 SB-8 出土遗物 (2)

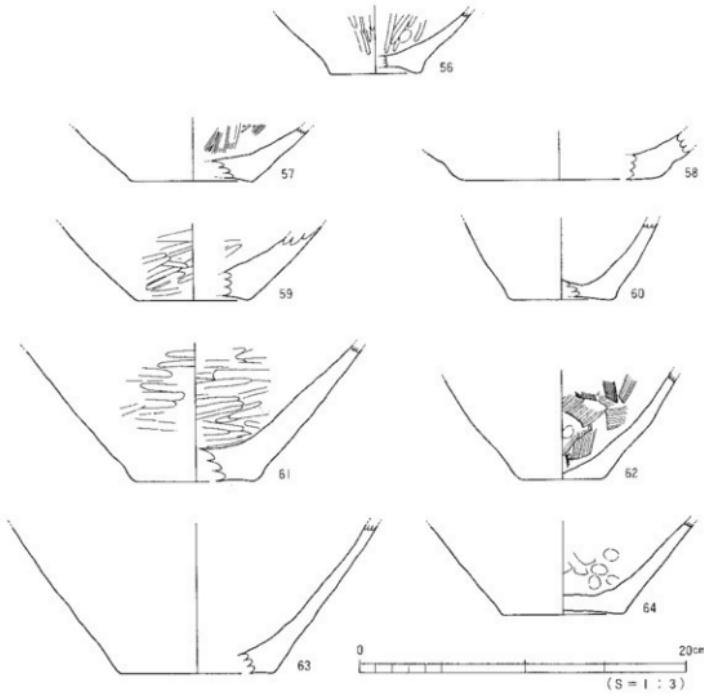


図22 SB-8 出土遺物 (3)

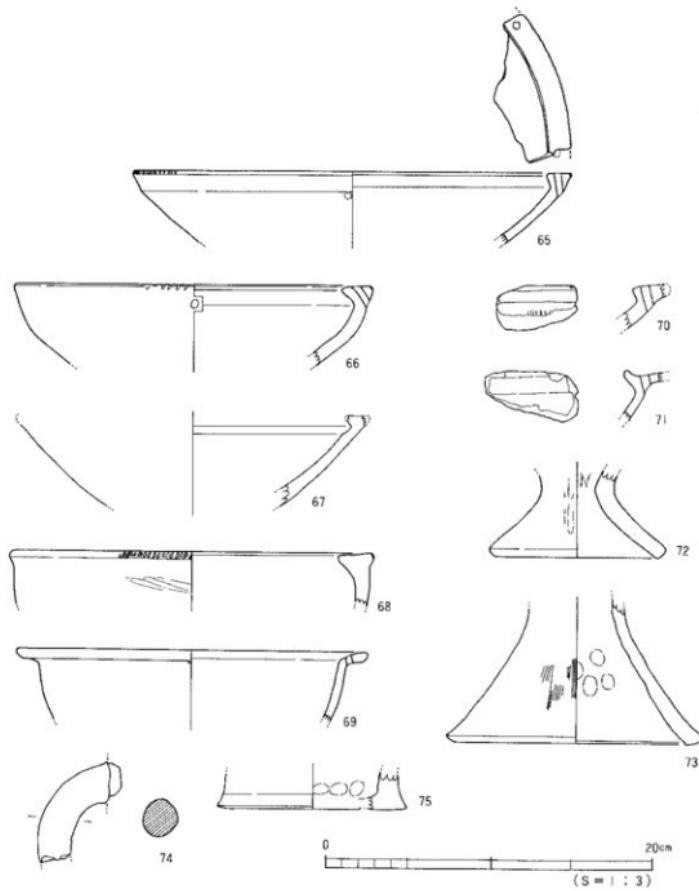


图23 SB-8 出土遗物 (4)

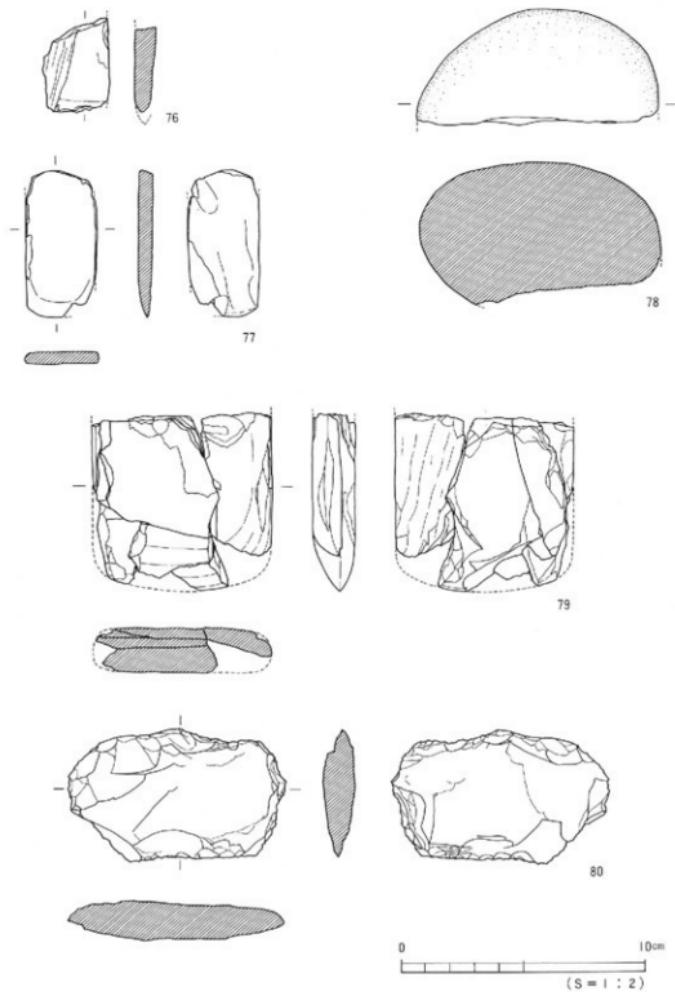


图24 SB-8 出土遗物 (5)

S B - 9・10・11 (図25・26・28)

調査区の南端で、切り合うように検出された、隅丸方形住居址群で、S B - 9がS B - 10を切っているが、S B - 11の遺存状況が非常に悪く、S B - 9・10との前後関係は、詳らかではない。遺物の出土は、S B - 10からの弥生土器2点のみである。

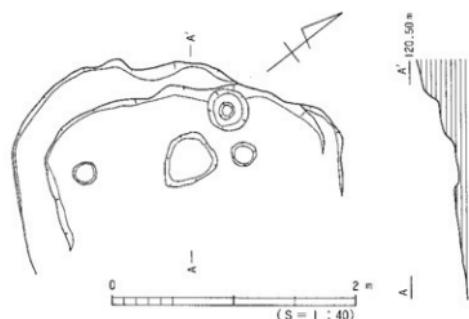


図25 突穴住居SB-9

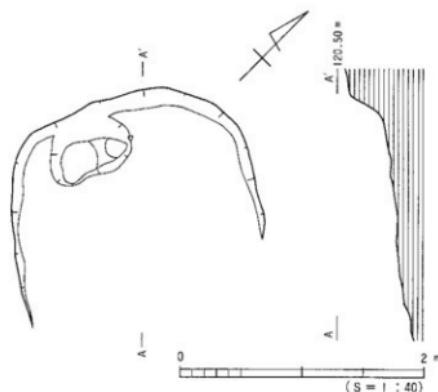


図26 突穴住居SB-10

S B - 10出土遺物 (図27)

壺 (81) 短い頸部から短く開口口縁部を持つ口頭部の小片。口端部を僅かに拡張するが、罐面には施文は持たない。

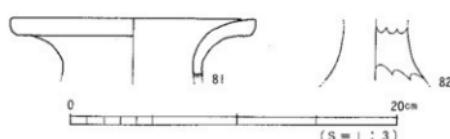


図27 S B - 10出土遺物

高環(82) 脚柱上端部の片、遺存部位で確認される範囲は中実である。

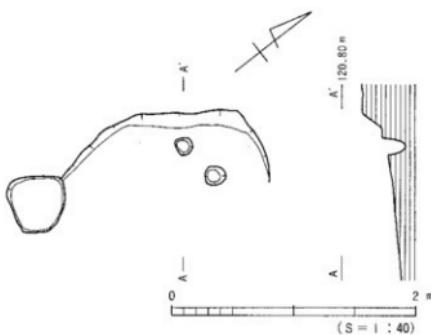


図28 高穴住居SB-82

S B-12・13・14 (図29・31・33)

大型円形住居S B-8の周辺で検出されたもので、S B-8に切られるS B-13は、円形住居址として扱っているが、その形状からすると段状遺構としたほうがよいかも知れない。

S B-12出土遺物 (図30)

甕(83~87) 83は復元口径30.5cmを測る口頭部片で、頭部に圧痕文突帯を持つ。突帯は低く、段のようになっており、口縁部と同一の粘土帶で成形されている。口縁部内面には貼り付け際の指頭圧痕が残っている。無文の甕84の口縁部は、貼り付けによるものか折り曲げによるものか判然としない。胴部内外面をヘラ磨きされるが、磨きというよりはむしろ撫でつけたような非常に粗雑な調整である。85は口縁部折り曲げによる粗製の小型甕。底部は86・87の2個体あるが、いずれもくびれの上げ底の形態である。

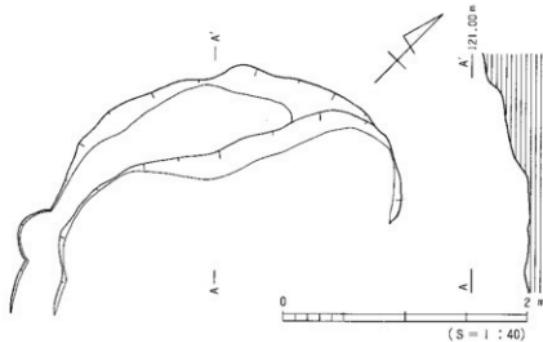


図29 整穴住居SB-12

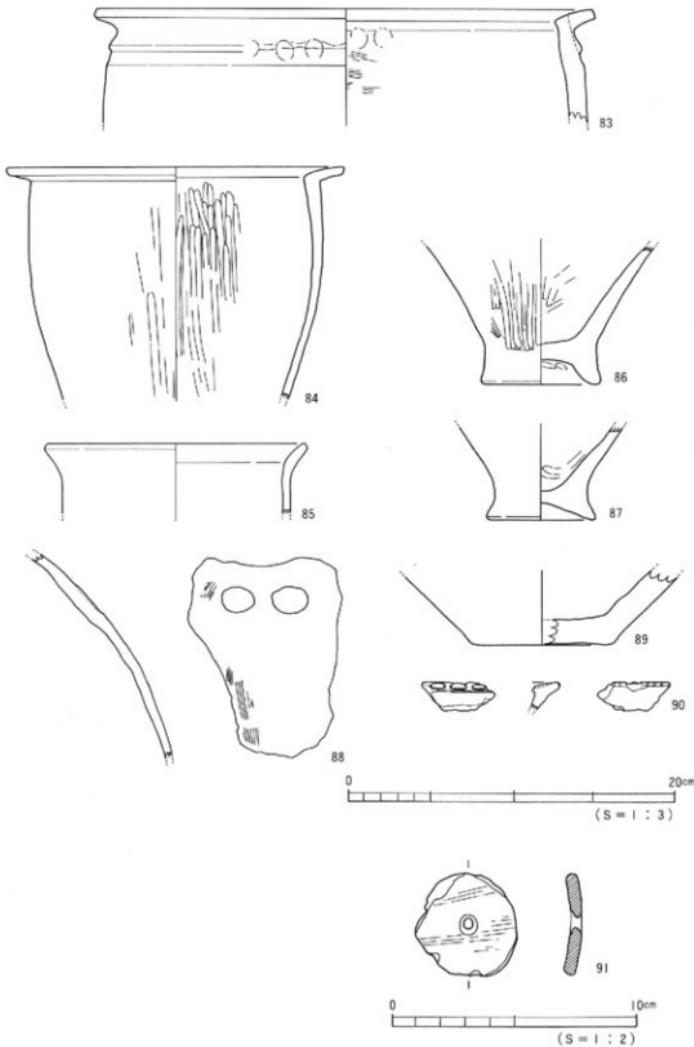


図30 SB-12出土遺物

壺（88・89） 大型壺の胴部上位の片88は、2個の円形浮文を貼り付けられている。89は平底の壺底部。

高坏（90） 口縁部の小片、口端部を内外方に拡張し、上面に円形浮文が貼り付けられ、外端部に刻み目を施されている。

紡錘車（91） 壺の胴部片軸用の紡錘車で、両面から穿孔されている。重量9.8g。

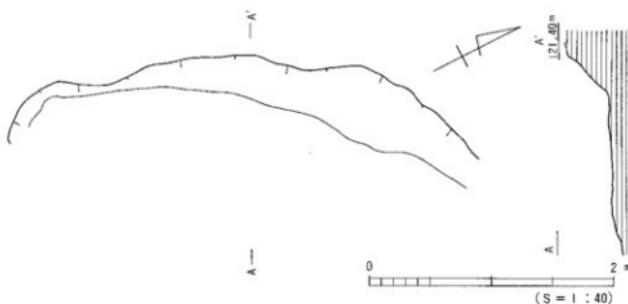


図31 整穴住居SB-13

S B-13出土遺物（図32）

壺（92～95） 無文の口頭部片92～94と、さほど大きくくびれない上げ底の底部95の出土がある。

高坏（96～99） 96は口端部を内外方に拡張し、外端部に刻み目を施した口縁部片で、外面の磨きが顕著である。97も口端部を拡張するが、内側の突出部が若干斜め上方に立ち上がるものである。98は脚柱基部片で、充填の剥離痕が観察される。99は脚裾部の小片で、平坦な端面全体で接地する。

鉢（100） 直口のジョッキ形土器の口縁部と思われる。

壺（101・102） 平底の底部片101は堅硬な焼成で、胴部内外面を磨かれている。口縁部片102は、復元口径25.3cm、口端部を下方に拡張し、剥離が著しいが端面にヘラ描の山形文の痕跡を認めることができる。内面には円形浮文を貼られている。

S B-14出土遺物（図34・35）

壺（103～109） 口頭部4点と底部3点の出土がある。103は短く太い頭部から外上方に短い口縁部が開く。口端面と口縁部の外面を横撫でされる他は磨かれている。104はラッパ状に開いた口縁部で、口端部を僅かに上方に拡張し、端面に3条の凹線状の施文を持つが、この施文は浅く、断面形がV字形を呈する沈線に近いもので、各線間の凸部は横撫でによる丸みを持たない。内面は横方向のヘラ磨き、外面は横撫でされている。105は比較的細身で長めの頭部片で、頭部と胴部の境に断面三角形の突帯が巡る。内面には紋り痕がみられる。106は大型壺の頭部片、圧痕文突帯を持つ。3個体ある底部のうち、107・108は窪み底、109は平底、109の外面には磨きが顕著である。

壺（110・111） 110は底径6.9cmの胴部下位～底部の片で、くびれの上げ底になるものである。胴部の外面を縱方向に磨かれ、内面は撫でられている。111は、口縁部折り曲げの小型品。

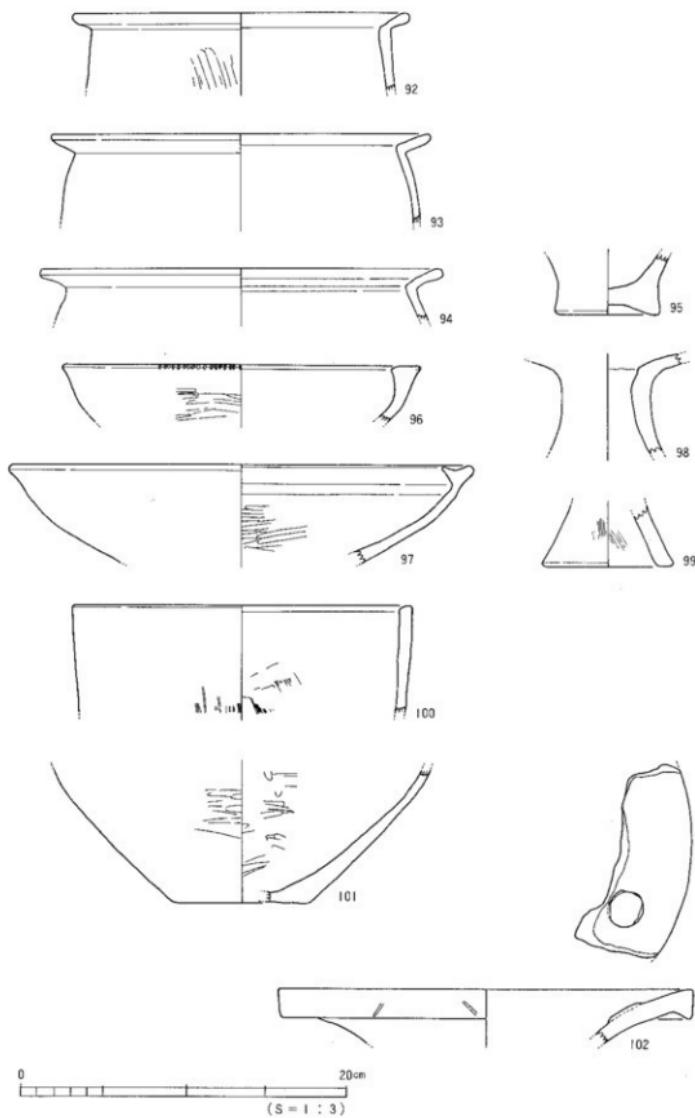


图32 SB-13出土遗物

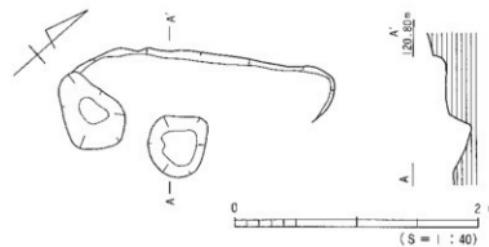


図33 整穴住居SB-14

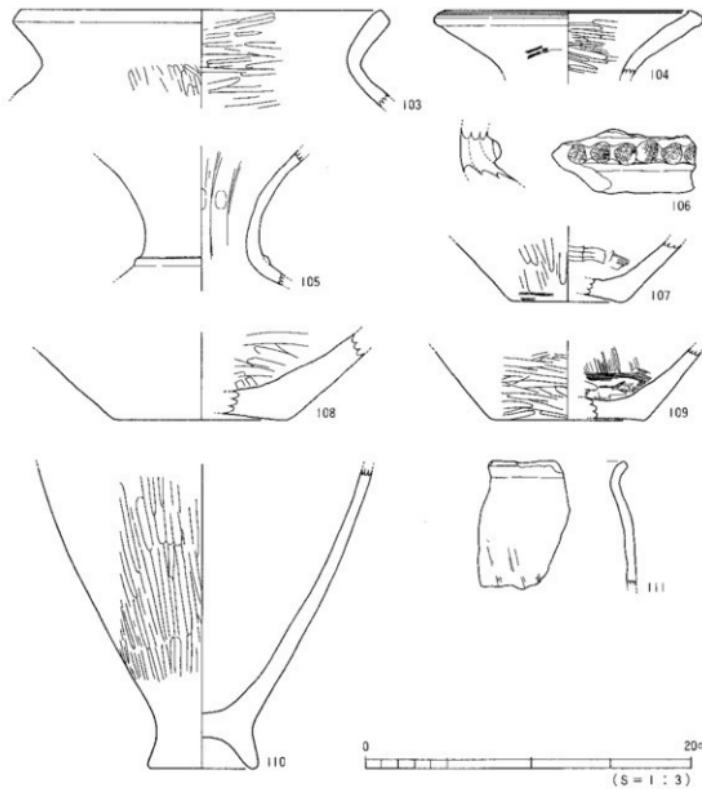


図34 SB-14出土遺物(I)

石庖丁 (112) 緑色片岩製の石斧破損品を石庖丁に転用しようとしたものと思われるが、未製のままで終わっている。片面には石斧としての刃部の研磨がみられるが、一方の面は剥離面そのままである。長側縁の一方には石庖丁刃部を作り出そうとした剥離調整があり、また、両面からの穿孔は貫通しないまま放棄されている。

窪み石 (113) 砂岩の扁平な円盤の両平坦面が大きく窪み、また、長側縁の両面にも敲打痕がみられる。重量730gを量る。

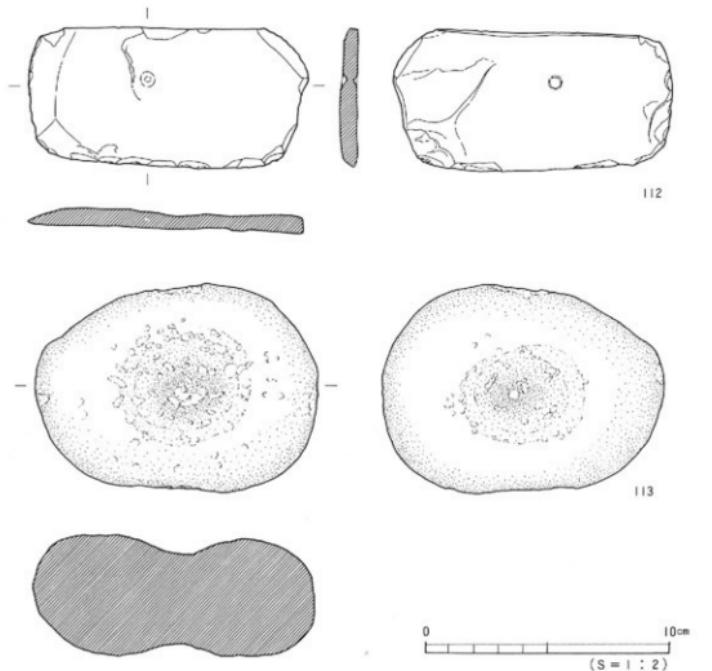


図35 SB-14出土遺物 (2)

S B -15 (図36)

調査区南端でその半分程度が検出された。
一辺2m規模の隅丸方形住居址と考えられる。

S B -15出土遺物 (図37)

壺 (114・115) 窪み底の底部片2点の
出土がある。

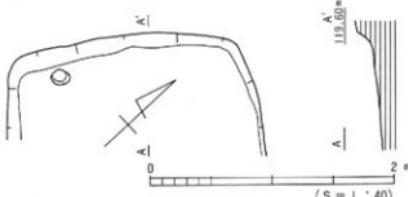


図36 整穴住居SB-15

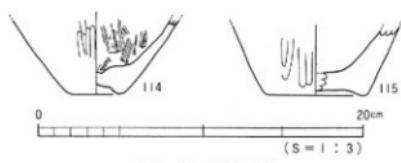


図37 SB-15出土遺物

S B-16 (図38)

調査区南西部の段状に整地された部分で検出された、南北棟の掘立柱建物。検出された柱痕跡によれば、桁行2間、総長4.4mで、柱間2.2m、梁行1間、2~2.25mの規模となる。桁行中央の柱穴は小規模で

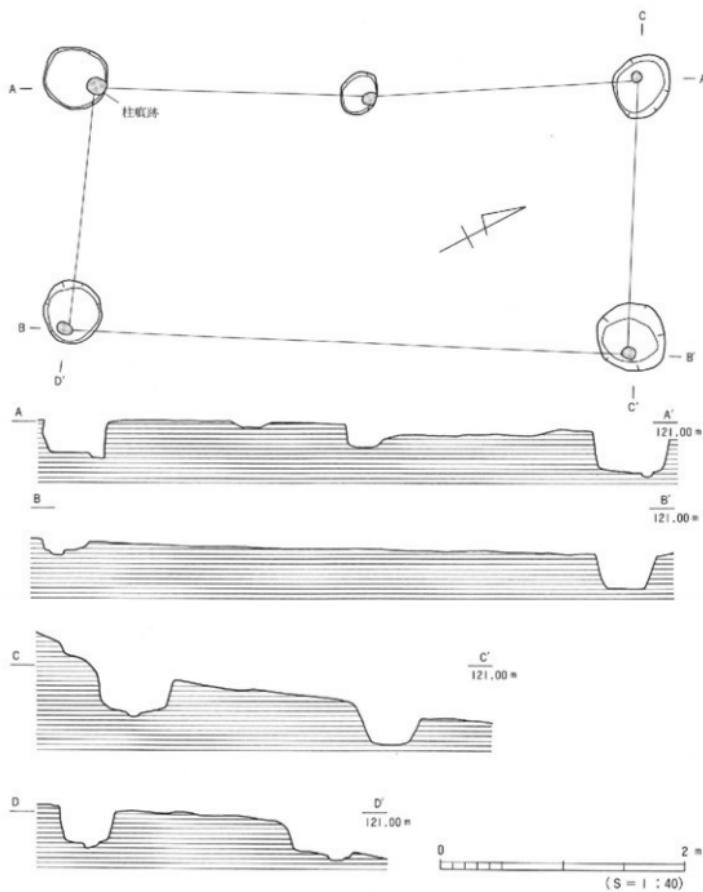


図38 掘立柱建物SB-16

浅く、これに対応する斜面下方側の小柱穴は遺存していない。柱穴埋土からの遺物の出土がある。

S B-16出土遺物(図39)

甕(116) P-1出土。頭部圧痕文突帯と口縁部とを一体となって貼り付ける甕の口頸部で、突帯というよりは段の下端を压痕で刻んだような形態である。口縁部にはヘラ状工具による刻みが施される。

石鎌(117・118) 磨製石鎌の117は、P-4出土の基端部の片で、綠泥片岩製である。横断面形は最大厚2mm弱と非常に薄い紡錘形で、鎌はない。基部をU字形に抉り込んでいるが、この部分も入念に磨かれている。現況重量1.3gを量る。118はP-2出土、サヌカイトの打製による小型鎌で基端部の一部と先端部を欠いている。現況重量0.5gである。

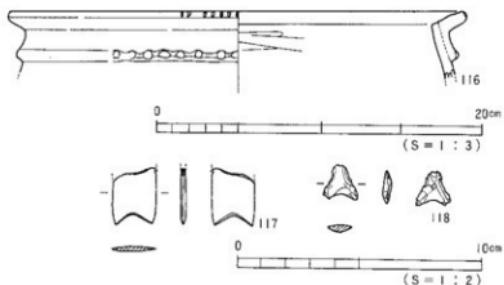


図39 SB-16出土遺物

S B-17(図40)

調査地北東隅検出の隅丸方形住居址。

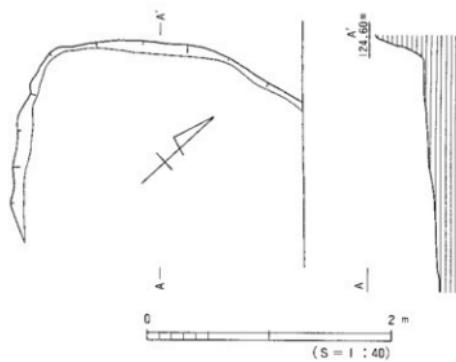


図40 断穴住居SB-17

S B-17出土遺物 (図41)

甕 (119・120) 頸部に圧痕文突帯を持つ口縁部小片 2点の出土がある。119は、断面三角形状の短い口縁部、120はやや済手で若干長く伸び、端面に割みを施される。

壺 (121~124) 口縁部小片 2点のうち、121は端部を上下方に拡張し、端面にヘラ書き山形文を施している。122は、壺部を特に下方に拡張、端面には非常に浅く、不明瞭な凹線状の窪みが2条巡る。123・124は、両者ともに平底の底部片。

高坏 (125・126) 口縁部125は、浅い椀状の形態で、口縁部外面に5条の凹線文を持つ。この凹線は壺122の口端面のそれや、S B-14出土の104などに比べると、凹線らしい凹線といえる。126は、脚柱部と坏部との接合部の片、坏底部は充填され、脚外面にはヘラ磨きがみられる。

鉢 (127) 把手を持つ鉢、所謂ジョッキ形土器の底部である。回転台形土器といわれているものに似るが、弥生時代中期中頃の祝谷六丁場遺跡などでジョッキの底部としての出土例がある。

石庵丁 (128) 緑色片岩製石庵丁と考えられる磨製石器の刃部小片。

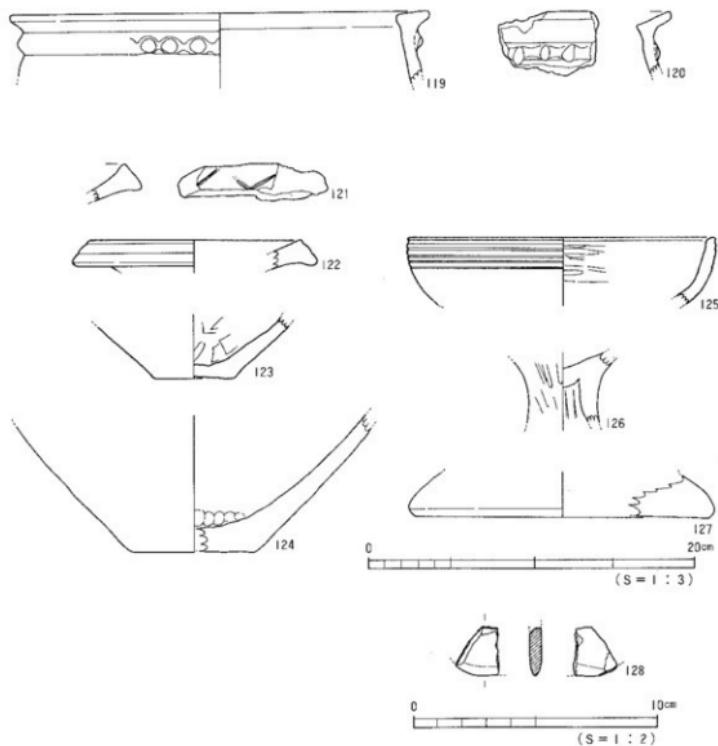


図41 SB-17出土遺物

S B-18 (図42)

調査区のはば中央部で検出された、桁行2間、梁行1間の掘立柱建物。四隅の柱穴は、径・深さともに1mと大きく、桁行中央の柱穴は小規模である。また、四隅の大きな柱穴は、それぞれ桁行側の小規模な柱穴を切っており、本来、これら小規模な柱穴で構成される1×2間の建物を建て替えて桁行を拡張したものと考えられる。なお、大柱穴の下位部分には直径15~20cm程度の柱痕跡が確認される。また、柱穴内柱痕跡の上位部分では柱の周囲を掘り鉢状に掘りくぼめて、柱を抜き取った痕跡がみられ、この抜き穴から、弥生土器片が出土しており、建物廃棄に伴う祭祀行為が行われたものと考えられる。

S B-18出土遺物 (図43)

甕 (129~131) 129・130は口縁部折り曲げによる無文甕である。129はP-4出土で口径17.7cm、胴部外面は継ヘラ磨き、内面は継方向に粗く搔き取ったような削りの痕跡が残っている。130・131はP-1の出土。131は口縁部を欠く胴部上位の片で、頸部に圧痕文突帯が巡り、その下方にヘラ状工具による列点が刻まれている。

鉢 (132) P-4出土のショッキ形土器の把手片。

壺 (133~137) すべてP-1の出土。133~136は比較的大型の壺底部で、平底もしくは若干の窪み底になるものである。137は、20cm程度の器高になると考えられる小型壺の下半部で、底径6.2cmの平底からボウル状の胴部が立ち上がる。

勾玉 (138) 一部を僅かに欠損するが、ほぼ完形の土製勾玉である。穿孔は焼成前に片面から行われている。P-3の出土。

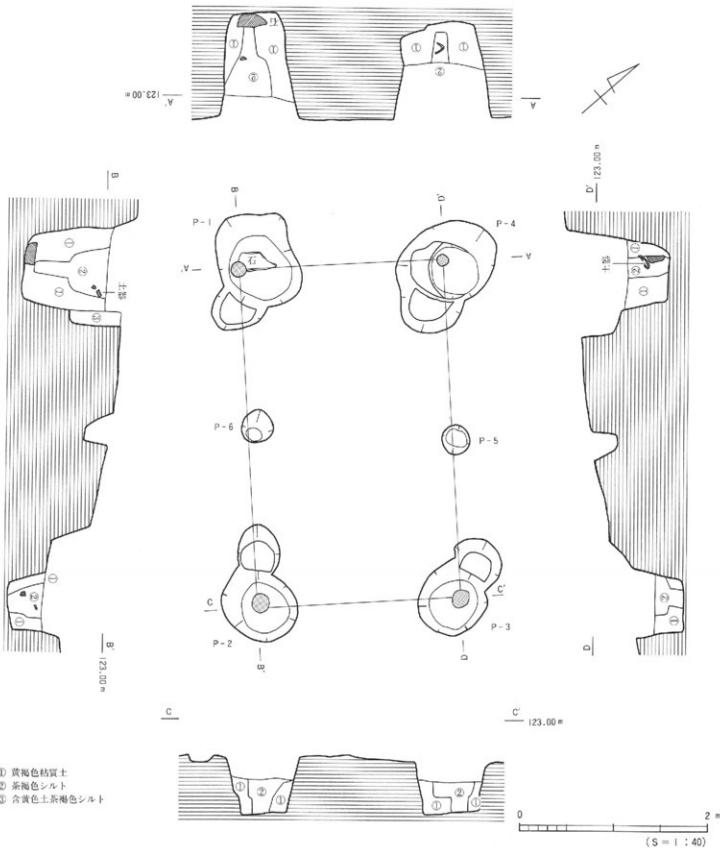


図42 塵立柱建物 SB-18

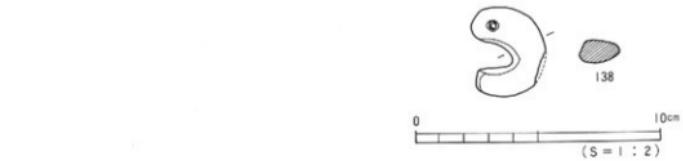
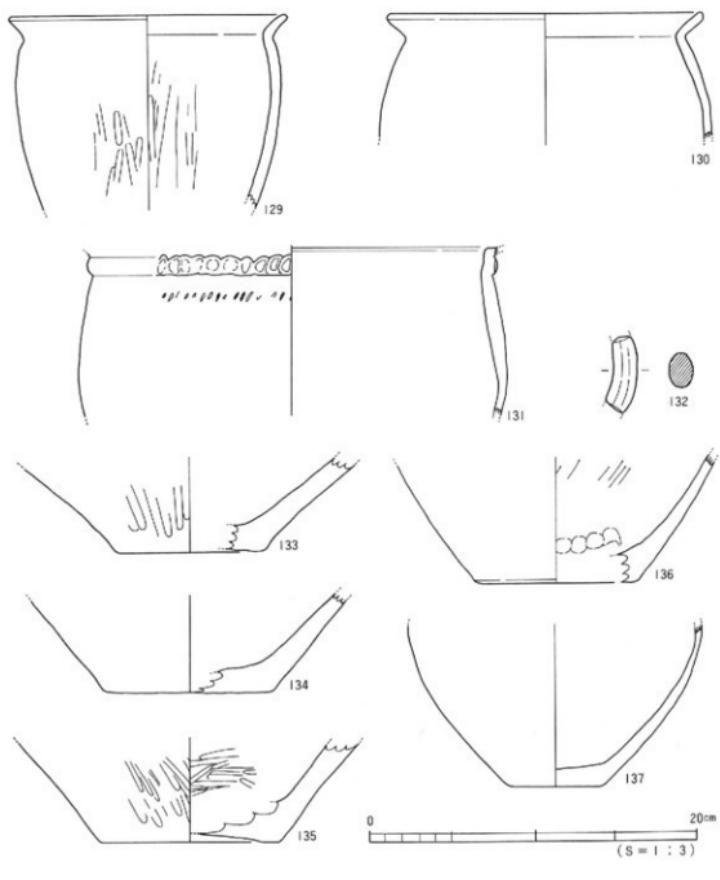


図43 SB-18出土遺物

2. 溝・柵列・段状遺構 (図44~51)

調査では、住居や建物のほかに溝や柵列、段状遺構などの遺構が検出されているが、これらの遺構は、北西から南東への斜面傾斜に直交するように設けられている。9条検出された溝は、幅1m前後、U字形の横断面形を呈し、長さ7~8mで舟底形に収束するものが多い。10基検出された柵列のうち、SA-1~SA-7は、ほぼ直線的に並ぶ4~5本の柱列で構成され、長さ4~5m程度のもの、SA-8~SA-10は杭列によるものと考えられ、0.3~0.4m間隔の逆円錐形の穴が若干不規則に並ぶもので、調査地の南方の一角で集中的に検出された。これらの溝や柵列は、堅穴住居や掘立柱建物の上方に位置する場合が多く、これら斜面立地の建物群への流水・流土に対する配慮のための施設であったものと考えられる。また、不整形に斜面をカットし、平坦面を確保しようとしたと思われるものを段状遺構とし、略号SD-Xで表現している。

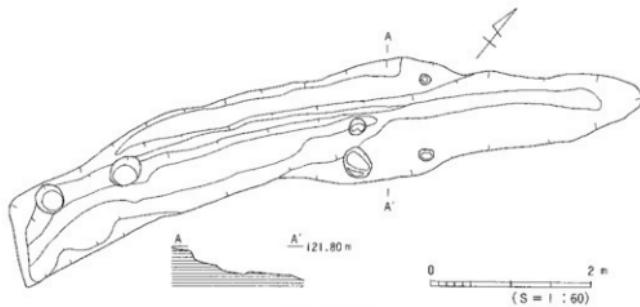


図44 溝SD-1

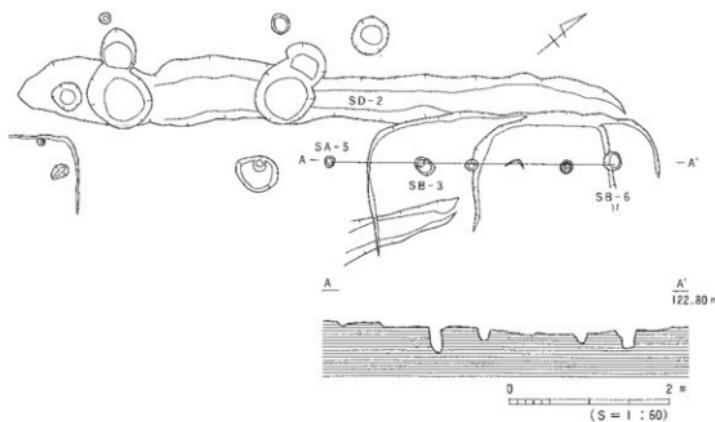


図45 溝SD-2、柵列SA-5

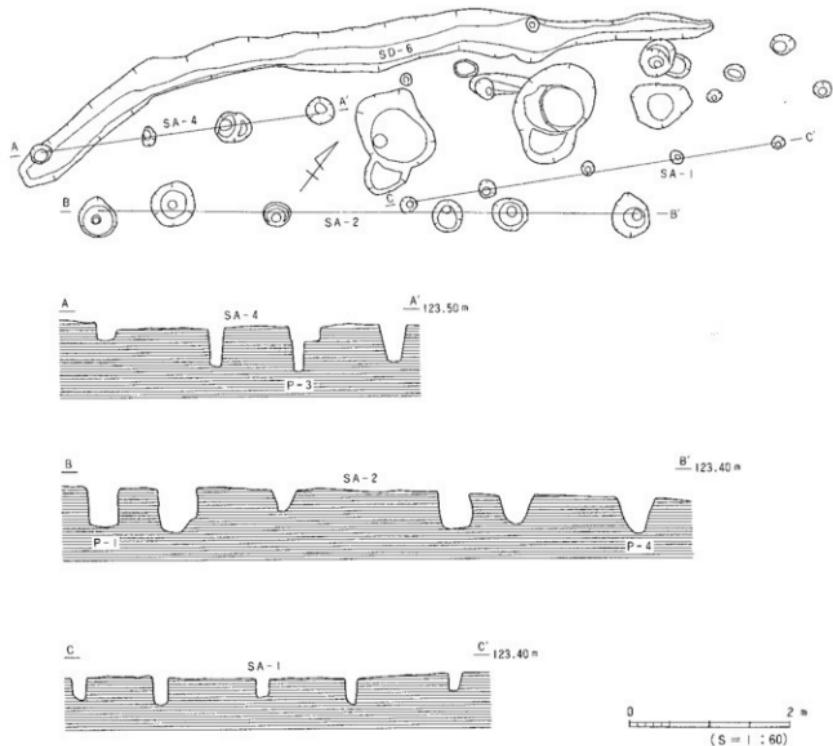


図46 滝SD-6、縦列SA-1・2・4

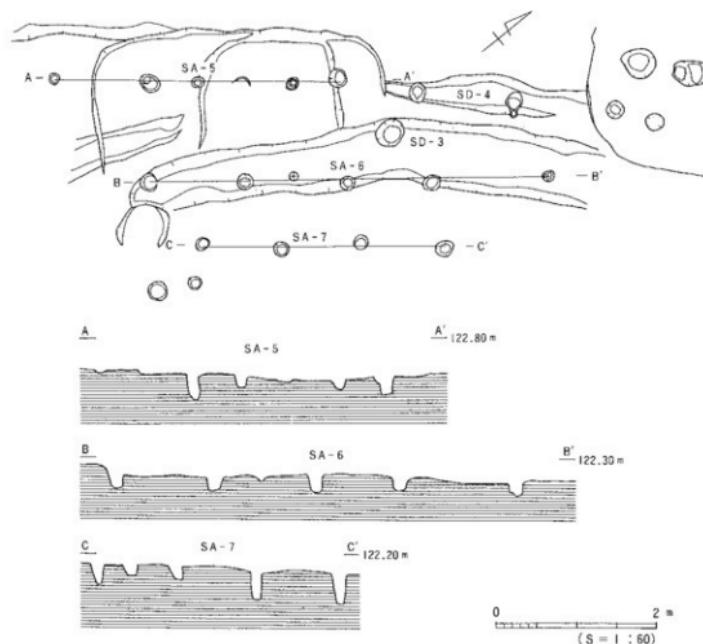


図47 溝SD-3・4、縦列SA-5～7

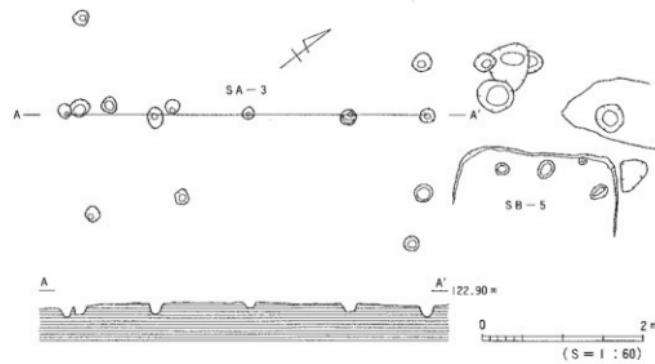


図48 縦列SA-3

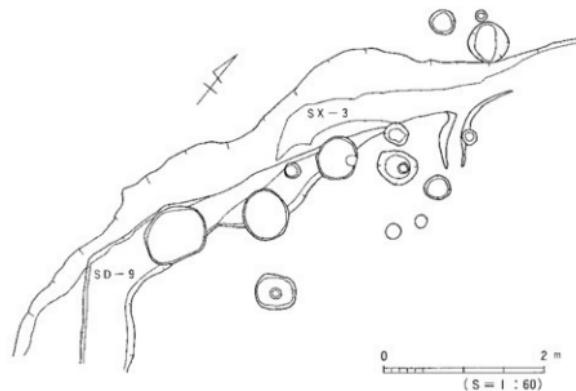


図49 溝SD-9、段状遺構SX-3

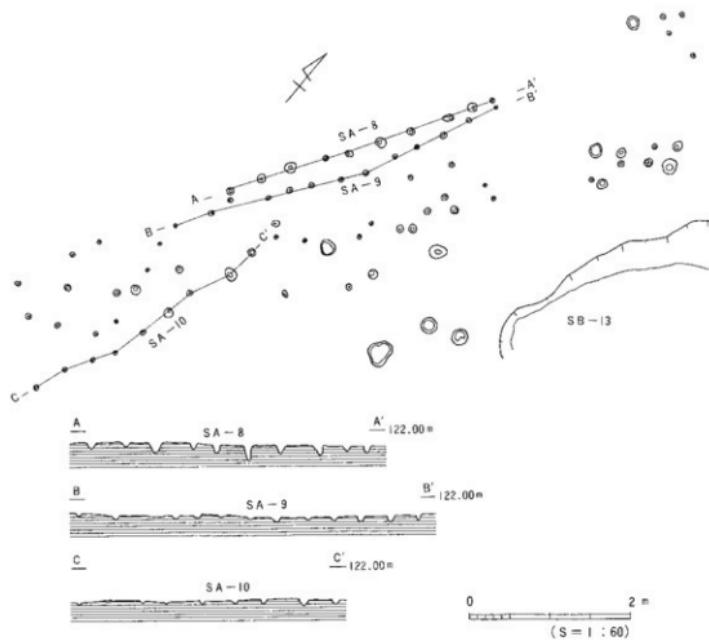


図50 槽列SA 8-10

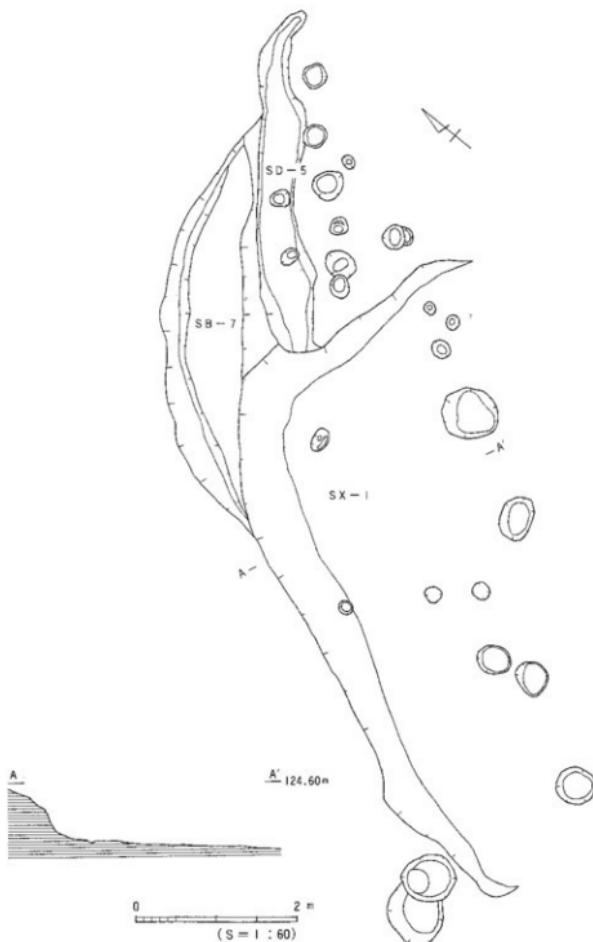


图51 满 SD-5、段状泥炭 SX-1

SD-2 出土遺物 (図52)

壺 (139) 大型壺の口縁部片、上下に拡張した口端部の端面にヘラ描き斜格子文が施文されている。

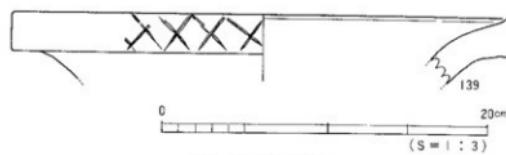


図52 SD-2 出土遺物

SD-3 出土遺物 (図53)

高环 (140) 口縁部を内外方に水平に拡張した楕円形の環部。口縁部外面には櫛齒状工具による沈線が、その下位と口端面には同様の工具による斜格子文が施文されている。なお、この工具は3本を単位としている。

壺 (141~143) 口縁部片142は、口径23.3cm、水平に近く開いた口縁端部を下方に拡張、その上端部に刻み目を施している。内外面ともに横撫でされている。底部143は、やや突出した平底から細身の胴部が立ち上がり、144は平底にボウル状の胴部を持つ。

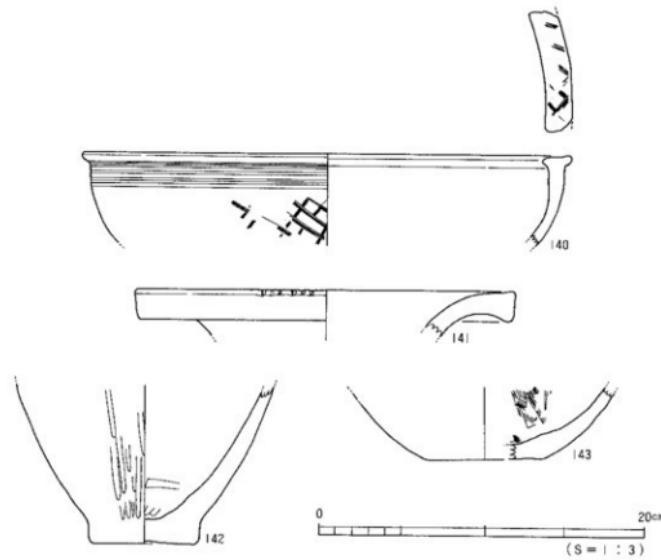


図53 SD-3 出土遺物

SD-5 出土遺物 (図54)

甕 (144~146) 口頸部の片3点のうち、144は口縁上端面を2本単位の櫛歯状工具による斜格子文と2個一对と思われる円形浮文で加飾、さらに頸部に複数の断面三角形状突帯、棒状浮文を施している。なお、口端部や、突帯には細かい刻み目を加えられている。145・146は口縁部折り曲げによる甕、146の頸部には、刻みや圧痕などを持たない断面三角形突帯が巡る。

高坏 (147) 脚裾部の片、貫通する矢羽根透孔を持つ。脚端内面と端面を描むように横拂でするため、端部は僅かに内方に突出し、端面に浅い窪みが巡っている。

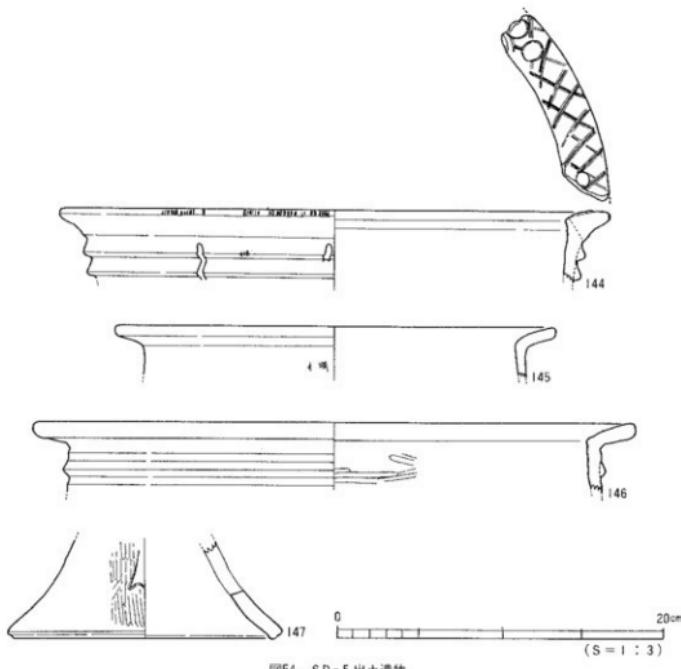


図54 SD-5 出土遺物

SD-7 出土遺物 (図55)

石鎌 (148) 安山岩製の凹基鎌、長さ2.2cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重量1.7gを量る。両面に主制離面を残し、成形は縁辺部だけの調整によっている。

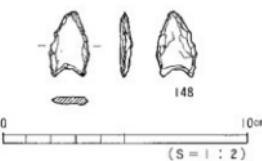


図55 SD-7 出土遺物

SD-9 出土遺物 (図56)

壺 (149・150) 無文の壺の上半部149は、口径24.1cmで、器高上位に張りを持つ胴部の最大径は口径を下回る。内面に稜を持って屈曲する口縁部は折り曲げによるものと思われる。胴部外面には輻方向の磨き、内面は刷毛目による調整の後施でられている。底部150は大きくくびれない上げ底の形態をなす。

壺 (151~154) 3点の底部は平底もしくは、僅かな窪み底。頸部154の外面には、3条の突帯が巡る。

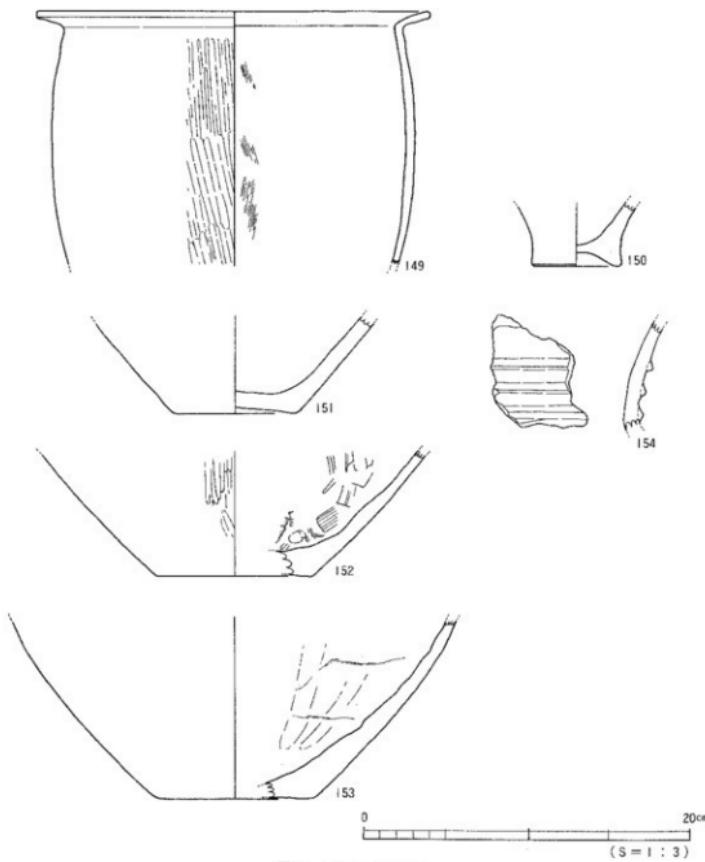


図56 SD-9 出土遺物

S X - 2 出土遺物 (図57)

甕 (155) 頭部に圧痕跡文突帯を持つ口頭部片。

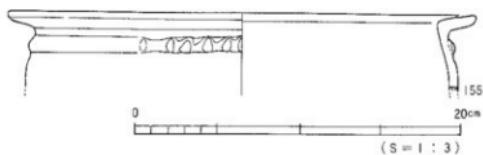


図57 SX - 2 出土遺物

S X - 3 出土遺物 (図58)

甕 (156・157) 156は、貼り付けの水平口縁に、圧痕文突帯を持つ口頭部片。157は、内傾する直口縁をやや下がった位置に、断面方形の高い刻み目突帯を貼り付けられる。本調査では、S B - 1に1点出土例がある。

壺 (158) 大型壺の底部片、内面は刷毛目調整の後、横方向に磨かれている。

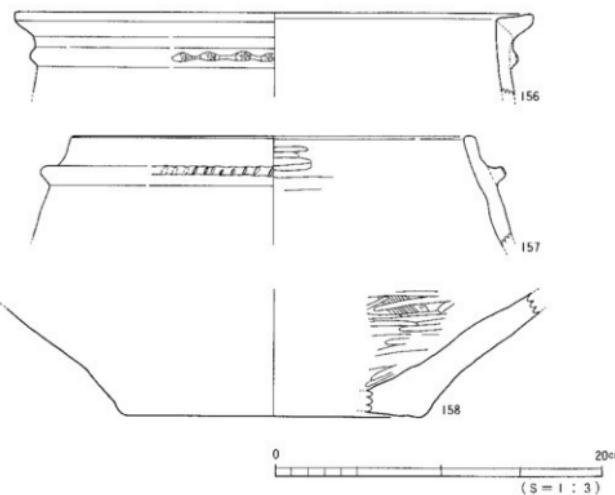


図58 SX - 3 出土遺物

S A - 2 出土遺物 (図59)

甕 (159・160) 162は、P - 1 出土の底部片、径7.2cmのくびれの上げ底の形態をなす。底面には、1.7~2.2cmの橢円形状に焼成後の穿孔が行われている。P - 4 出土の163も、くびれの上げ底の甕底部

で、底径6.2cmを測る。

鉢（161） P-4出土のジョッキ形土器把手部の片。把手の横断面形は、楕円形もしくは隅丸長方形の形状をなす。

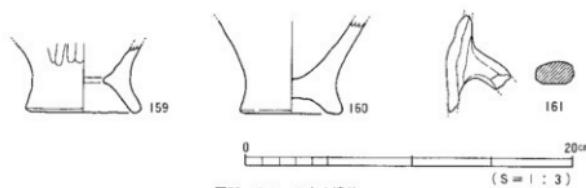


図59 SA-2出土遺物

S A - 4 出土遺物（図60）

鉢（162） 直口の口縁部片で、大型のジョッキ形土器口縁部と推定される。口端部を内外方に拡張、端面は平坦面をなす。P-3の出土。

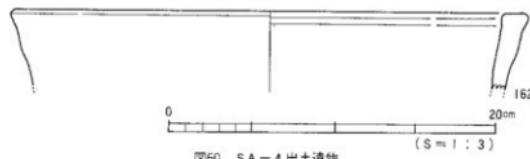


図60 SA-4出土遺物

3. 土壙・柱穴

掘立柱建物や、樹列を構成する柱穴を除いて、調査では200基を越える柱穴や土壙が検出されている。以下では、これらのうち遺物を出土した土壙、柱穴出土の遺物について記述する。

SK-2（図61）

調査地北西部で検出されたもので、長径1.4m、短径1.2mの不整楕円形のプランをなす。深さ20cm程度の遺存で、壙底はフラットな面をなし、南下がりの傾斜をなす。P-126を切り、P-127に切られている。

SK-2出土遺物（図62）

甕（163） 口縁部折り曲げによる小型甕、復元口径16.7cmを測る。

甕（164） 平底の底部片、胎土に石英、長石粒を多く含む。

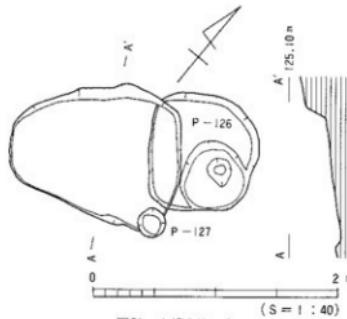


図61 土壙SK-2

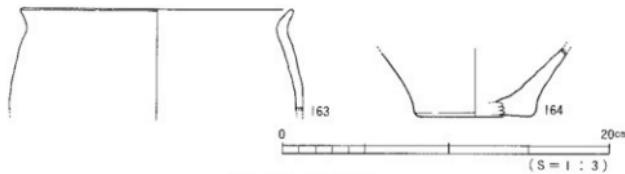


図62 SK-2出土遺物

SK-5 (図63)

調査地南部、杭列の下方、段状遺構 S X-3 の上方で検出された。径1.3m前後の不整円形で、擦り鉢状の断面形をなす。

SK-5出土遺物 (図64)

高环 (165) 復元径16.8cm、残存高6.4cmを測る脚部片。貫通する矢羽根透孔は6方向に復元される。脚端下面は、平坦な面をなし、端面全体で接地する。裾部外面には、3条の凹線状の沈線と刻み目を施されている。脚端外面は、横撫でにより、若干の凹面をなす。

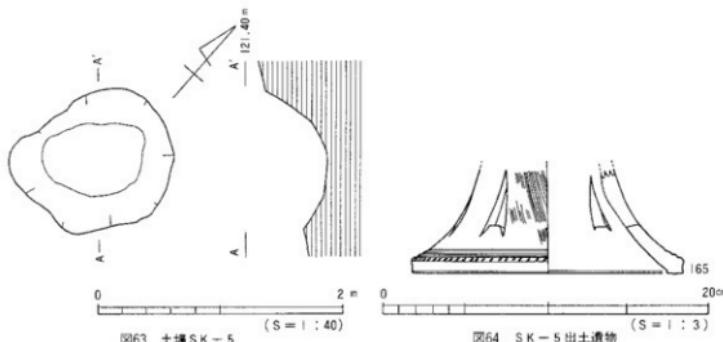


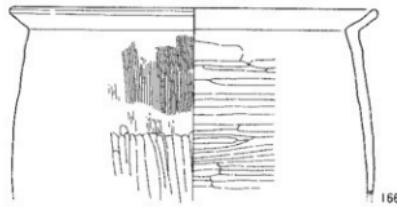
図63 土壌SK-5

図64 SK-5出土遺物

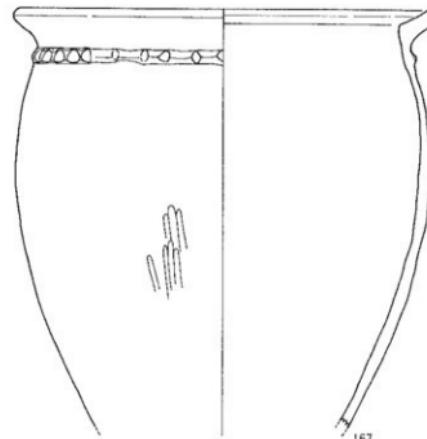
柱穴出土遺物 (図65~67)

甕 (166~170) P-125から2点の甕の出土がみられている。166は、無文甕の上半部片で、復元径22.5cmを測る口縁部は折り曲げによるものと思われる。内面に棱を持って屈曲した口縁部がやや内湾気味に外上方に開くのが特長である。胴部外面には、縦方向の刷毛目とヘラ磨き、内面には横方向の磨きが観察される。底部を欠失する167は、口径25.8cm、胴部最大径25.6cm、残存高25.6cmを測る。頭部には圧痕文突帯が這っているが、この個体もやはり口縁部が若干内湾気味に外上方に開いている。P-330出土の170もやはり底部を欠くが、完形に近い個体で、口径27.2cm、胴部最大径29.8cm、残存高37.9cmの比較的大型のものである。頭部に圧痕文突帯、口端部に刻み目を持つ。底部にはP-100・244出土の168・169があるが、どちらもくびれの上げ底の形状をなすものである。

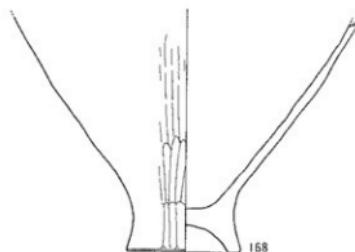
高环 (171) 口縁部を内外方に拡張した、水平口縁の环部片。P-177の出土。口縁部上面から口



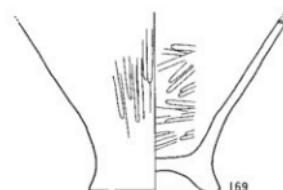
166



167



168



169



図65 柱穴出土遺物(1)

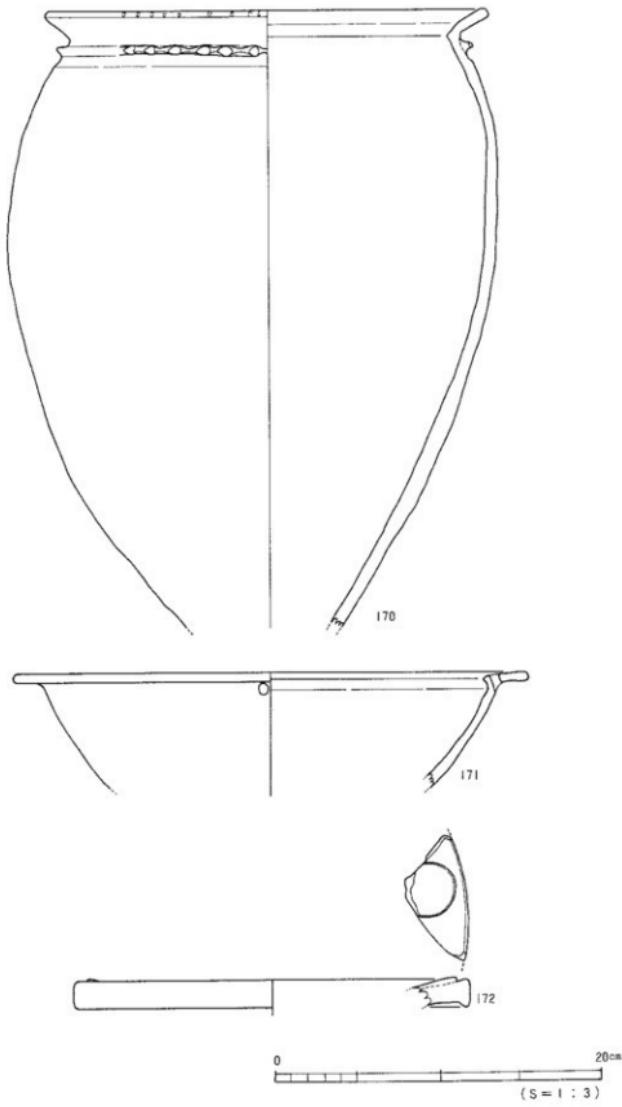


图66 柱穴出土遗物(2)

縁基部に向けて焼成前の穿孔が行われている。復元口径31.5cmを測る。

壺(172) 内面に円形浮文を持つ口縁部の小片。P-46の出土。

石鐵(173~175) サヌカイトの石鐵破損品3点、順にP-83・224・178の出土で、現況重量はそれぞれ2.1g、1.4g、1.8gを量る。

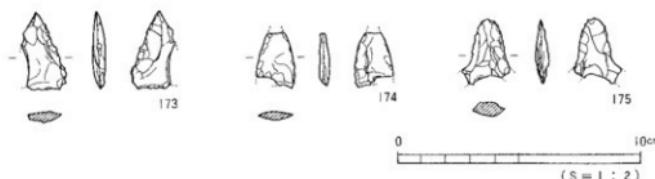


図67 柱穴出土遺物(3)

4. 包含層出土の遺物(図68~71)

壺(176~187) 口縁部には、端部の下方への拡張が顕著な、所謂下垂口縁の形態をなすものと、拡張は行うが、さほど顕著でないものとがある。176~178が前者で、後者が179・180・182、181もどちらかといえば後者の範疇に属する。176・177は、拡張した口縁面に棒状工具による山形文を施されている。178は、口径26.4cm、筒状の頭部には多重の断面三角形突帯を持つ。現状では3条まで確認できる。大きく外反する口縁部の端面は無文であるが、内面には2個一対の円形文が4方向に貼り付けられている。口端部を大きく拡張しないものは、すべて無文である。

183は、円形浮文を持つ肩部の片。底部184~187は、平底もしくは僅かな窪み底で、内外面にヘラ磨きを多用されている。

甕(188・189) 188は、胴部の張りを上位に持つ腰の上半部で、口径25cm、胴部最大径26.6cmを測る。頸部に压痕文突帯が一条巡る。内面に棱を持って屈曲した短い口縁部は、外上方に開き、端部を面取りする。胴部外面には、横ないし斜め方向のヘラ磨き、内面には磨きに近い幅広で浅い崩毛目が顕著である。189は、口縁部折り曲げの小型甕である。

高环(190・191) 190は、脚柱部の片で、基部に近い部分に焼成前の円孔がある。外面には縱方向のヘラ磨き、内面には絞り痕が観察される。191は、水平口縁は環部片であるが、口端部の内外方への拡張はあまり大きくない。口端部上面には円形浮文が貼られ、この浮文に近接して焼成前の円孔が穿たれている。また、口縁部外面には刻込みが施されている。

鉢(192・193) 2点ともにジョッキ形土器である。192は、把手を欠くが、剥離痕が確認できる。器高11.5cm、口径10.1cm、底径7.1cm、胴部最大径12.2cmを測る、口すばまりの器型である。底部は平底の周縁が僅かに盛り上がっている。胴部の内外面とともに磨かれ、口縁部周縁を横撫でされている。剥離痕によれば、把手の断面形は円形に近い形態であったものと思われる。193は、把手部の片で、胴部との接合は差し込みによっている。

分銅形土製品(194) 長方形タイプ、無文の土製品の上半部片。幅6cm、厚さ2cm、復元長9cm程度の長方形土板の側縁を割り込んでいる。平坦な裏面に比べると、表面は若干の凸面をなし、磨きなどの調整も表面のほうが入念に行われている。焼成前の穿孔は裏面から両側面に、2孔を一对として

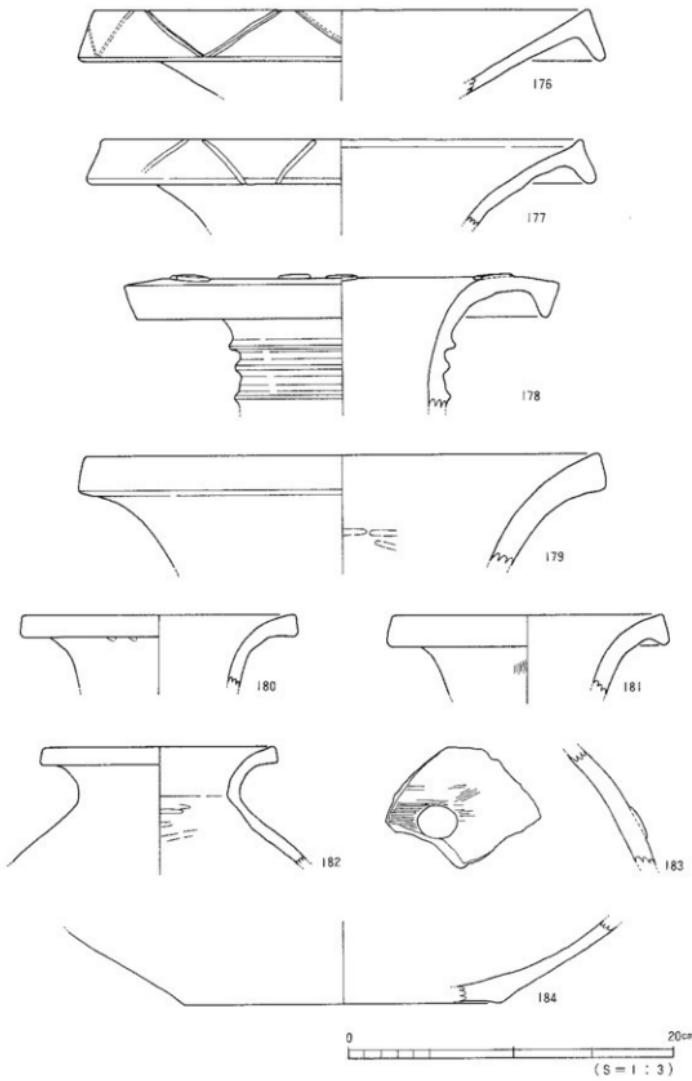


图68 包含层出土遗物(I)

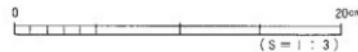
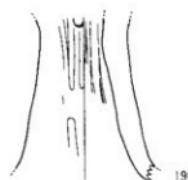
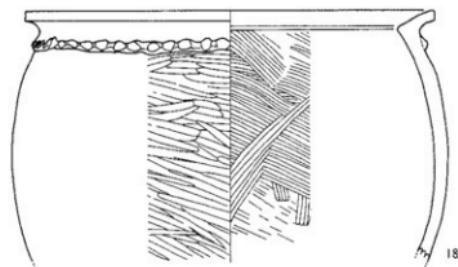
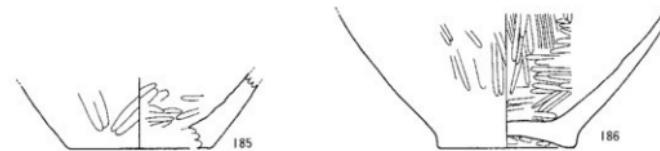


圖69 包含層出土遺物(2)

穿たれている。

紡錘車（195） 爪、または蓋の側部転用の紡錘車で、一部を欠損している。直径5cm、厚さ0.7cm、現況重量18.8gを量る。

土製勾玉（196・197） 尾部を欠く196と、頭部を欠く197とが出土している。196は、現長5cmで、頭部の影らみはなく、断面形は蒲鉾形に近い形状をなす。焼成は良好で、暗茶褐色の色調を呈する。胎土に砂粒を多く含んでいる。197は、現長2.4cm、腹部の断面形は梢円形、尾部に向かって扁平に潰されたようになっている。

管玉（198） 長さ1.6cm、直径0.4cmの滑石製。0.2cm～0.23cmの孔が片面から穿孔されている。

石斧（199・200） 両者ともに破損品、199は、平面短骨形の加工斧で、刃部を欠く。幅4.2cm、厚さ0.9cmを計る。緑色片岩製。200も緑色片岩を素材とする刃部の小破片である。

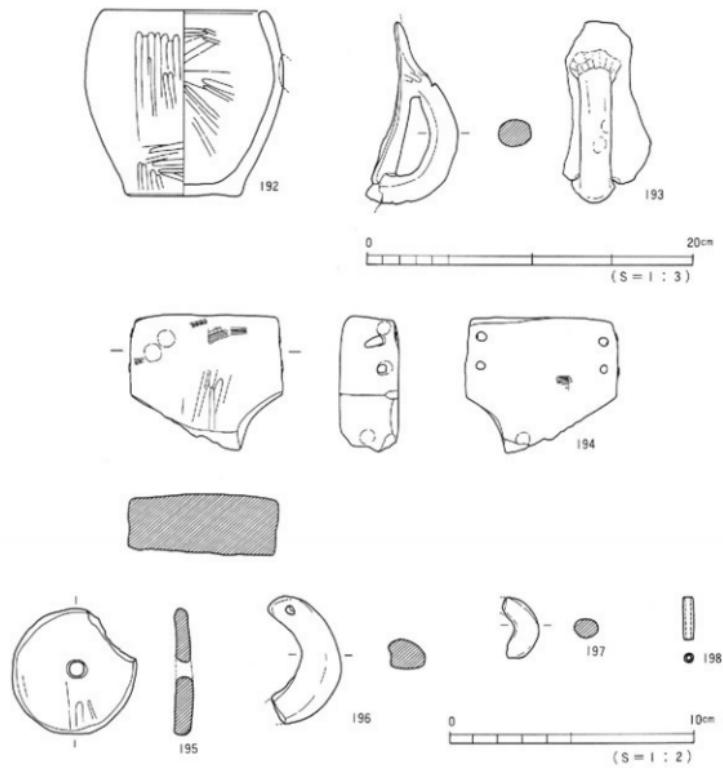


図70 包含層出土遺物(3)

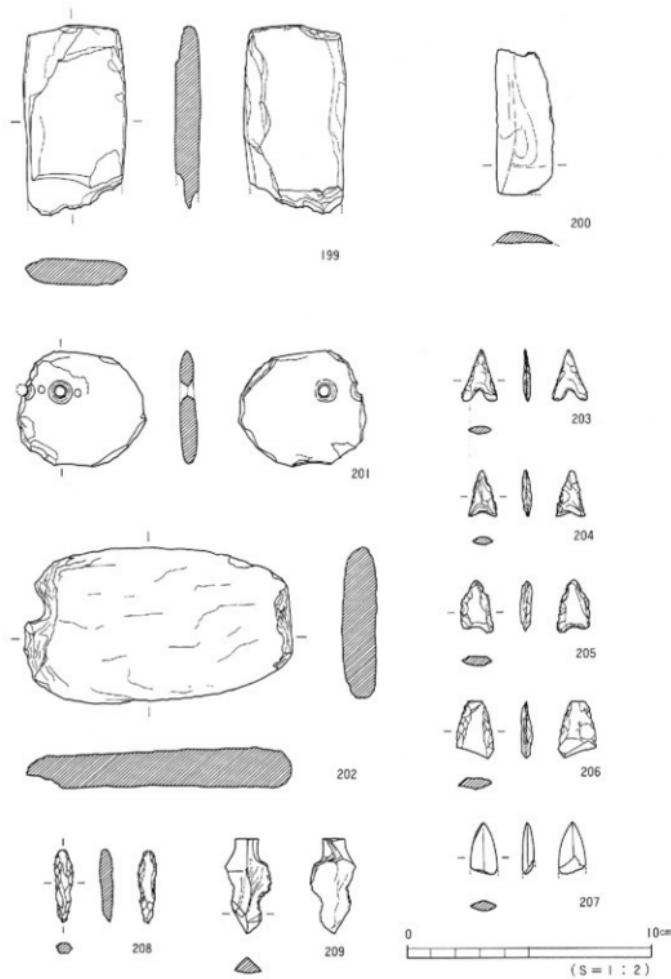


图71 包含层出土遗物(4)

円板状石製品（201） 石庵丁破損品の周縁を打ち欠いて円板状に成形している。背部と側縁の一部が生きており、梢円形もしくは杏仁形の石庵丁であったものと思われる。貫通する穿孔の他に、穿孔途中で放棄された、未貫通の穿孔痕が片面に残っている。緑色片岩製。重量28.1g。

石庵丁未製品（202） 緑色片岩の扁平な転石の両側端に打ち欠き・敲打痕を持つ石器素材で、研磨は行われていない。

石鎌（203～207） サヌカイト打製の203～206と、緑色片岩磨製の207とがある。打製のもののうち203・204は、重量0.4g、0.5gと小型で、全面に調整が施されているが、205・206はこれらよりやや大きく、ともに重量1.3gを量り、主剥離面を残している。

207は、柳葉形の磨製石鎌の尖端部片で、若干甘い鎌が両面に観察できる。現況重量1.2g。

石錐（208） 長さ2.9cmの完形品、サヌカイト製。

剝片（209） サヌカイトの不定形剝片。

IV まとめ

松山市西部の独立丘陵、大峰ヶ台丘陵上には弥生時代の遺跡群や各期にわたる古墳が存在することが知られていた。その最高所に位置する本調査区周辺にも、1974年の小規模な調査（1次調査）や表掲資料によって、弥生時代中期の集落が存在することが知られていたが、その時期については墓内第Ⅳ様式併行期ととらえられていた¹⁾。この調査の面図資料は現在散逸して、その正確な発掘地点等不詳な部分が多いが、伝えられるところによると、発掘区は本調査地の北東部に隣接した部分にあたり、検出された3種の住居²⁾は同一集落内の遺構と考えてよい。長井數秋氏によって組まれた、愛媛県下の弥生土器編年によれば該期の中子地方の土器の指標は凹線文の盛行にあり、その出現はⅢ様式の新しい段階にまで遡ることが指摘されている³⁾。長井氏以降も、東予地域や松山平野のより良好な一括遺物を用いた中期土器の編年作業が柴田昌児氏や梅木謙一氏によって進められており、時期区分の概念や各小期の設定に若干の相違はあるものの、概ね長井氏のいうⅣ様式の段階の指標は凹線文の定着と隆盛というところで一致している⁴⁾。ところで、本調査によって得られた資料は、中期中葉、長井氏のいうⅢの新段階、梅木氏の中期IIの段階にあたるものである。参考までに1次調査の資料の一部をここで紹介しておくが（図72～74）、本調査出土の遺物と変わることはない。したがって、この集落の存在していた時期は、從来の見解よりも遡って、中期中葉の段階ということに修正されなければならない。

今回の調査で出土した遺物には、包含層・遺構内を含めて大きな時期差はなく、検出された遺構群は、上述の段階の比較的短期間のあいだに営まれていたものと考えられる。これらの遺構のうち、溝、

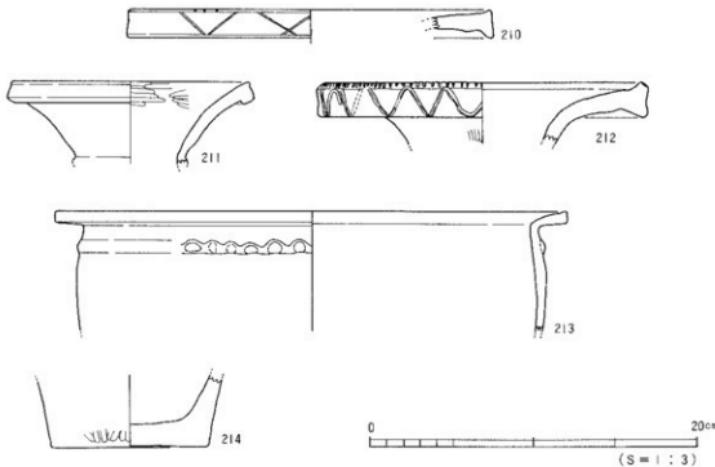


図72 1次調査 I号住居址(PD-I)出土遺物

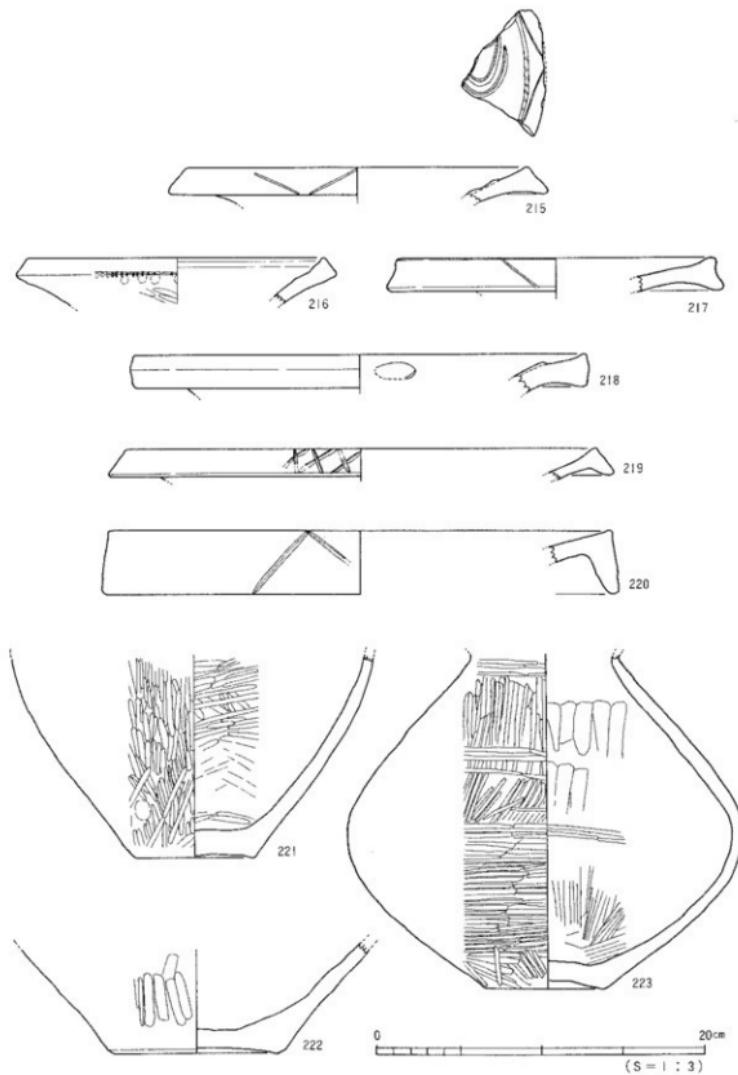


図73 1次調査 2号住居址(PD-2)出土遺物(i)

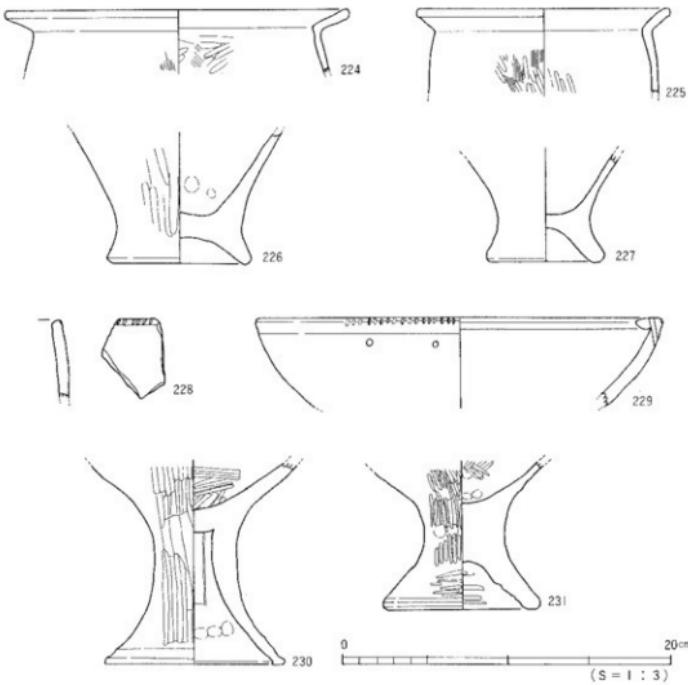


図74 1次調査 2号住居址(PD-2)出土遺物(2)

柵列、段状造構は斜面傾斜に対して直交するように設けられ、斜面立地の居住施設等の施設を流水・流土から保護したり、平坦面の確保のための施設であったことが想定される。竪穴住居には円形の大型のもの2、3棟と、10棟を越える隅丸方形の小型のものがあるが、小型のものは無柱で、複雑に切り合った状況で検出される場合が多い。おそらく、耐久性に乏しく頻繁に建て替えが行われていたものであろう。これに較べると、円形大型住居や掘立柱建物は、SB-8やSB-18にみられるように、比較的しっかりした施設であったように思われる。これらのことから、中心施設としての円形住居・掘立柱建物それぞれ1棟ずつと、付帯施設としての小型竪穴住居1～2棟を建て替ながらの1単位のようなものが想定できる。集落を全幅できたわけではないが、立地からみて、丘陵のこの部分に調査範囲を大きく上まわるほどの造構のひろがりは考え難く、1次調査の住居を含めても、せいぜいこのような組み合わせが1～2単位で、2期間或いは3期間程度継続的に営まれたものと思われる。また、少なくとも調査された範囲内では、祭祀場といえるほどの祭祀的遺物のまとまりや烽火のような焼土面はなく、遺跡全体の出土遺物にも平地の集落と大きく変わることはない。もっとも、松山平

野において、該期の平地の集落は全く解っておらず、持ち物の比較も、厳密にはこの時期を前後する弥生中期集落との対比の上でのことであって、この時期に限って言えば、母集落はおろか比較すべき対象がないのが現状であり、今後に課題を持ち越さなければならない。

先述のように、出土した遺物は弥生時代中期中葉に比定されるもので、松山平野でこの時期の遺物をまとめて出土した遺跡には、道後城北遺跡群中の祝谷六丁場遺跡の谷部包含層遺物がある³⁾。これらの遺跡の遺物で注目されるのは、次段階になって盛行する凹線文が僅かながら認められることである。本調査でいえば、S B-8出土の竪口縁部（遺物番号44）、S B-14の竪口縁部（104）、S B-17出土の竪口縁部（122）、高环口縁部（125）、S K-5の高环脚端部（165）の5点である。これらのうちには、いわゆる典型的な凹線文とは若干異なる122や125のようなものもあるが、こういった技法や施文部位を含めて、出現期の凹線文研究の上で良好な資料といえよう⁴⁾。また、S D-5の高环脚部（147）や、前出の165に施される矢羽根透孔についてもその出現や凹線文との関係といった意味で重要な資料となるものである。

註

- 1) 西田 実「大峰ヶ台遺跡」「高地性集落跡の研究 資料編」小野忠熙編 学生社 1979
- 長井数秋「農耕文化の形成と発展」「愛媛県史 原始・古代 I」「愛媛県史編さん委員会 1982
- 2) このうち、1棟は直径5.7mの円形堅穴性居で、その他の2棟も円形といわれているが、詳細は不明である。
「大峰ヶ台の高地性住居址」『松山市史料集 第一巻 考古編』松山市
- 3) 前掲註1) 長井氏文献。
- 4) 柴田昌光「東予地方における中期後半弥生土器に関する若干の考察」「遺跡 32号」遺跡発行会 1990
梅木謙一「西瀬戸内における弥生中期の土器様相」「古文化談叢 第34集」九州古文化研究会 1995
- 5) 宮崎泰好「祝谷六丁場遺跡」松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- 6) これについては、前掲註4) 梅木氏の文献において詳しく論じられている。

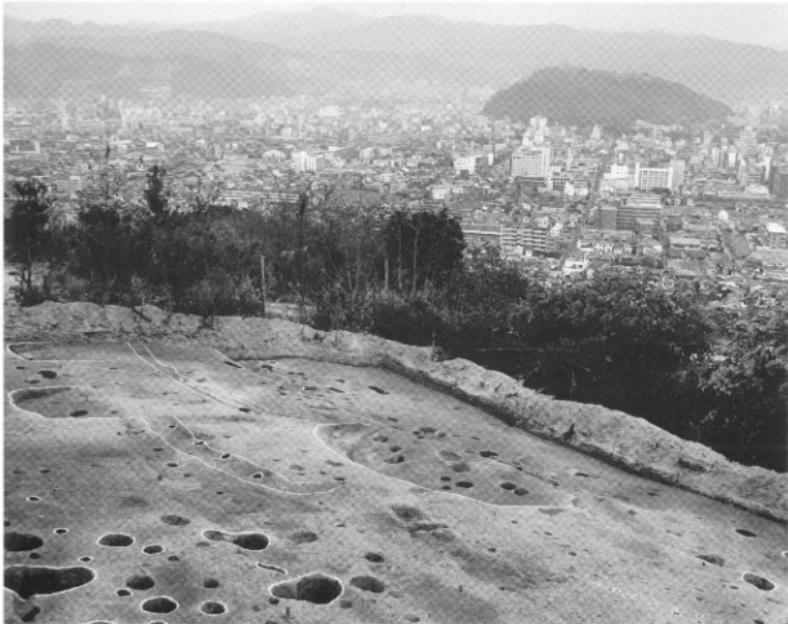
写 真 図 版



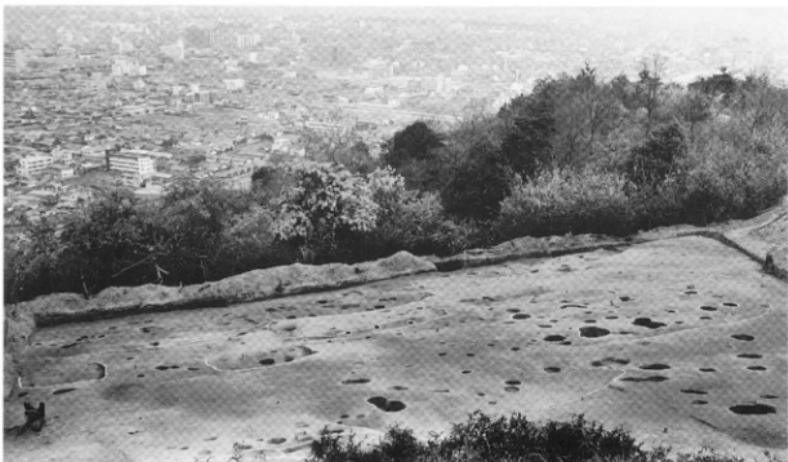
大峰ヶ台丘陵遠景（南より）



調査地伐採前の状況（北西より）



遺跡より松山平野東部を望む（西より）



調査地全景（北より）



SB-1 (南東より)



SB-2 (南東より)



調査地中央部の遺構（東より）



調査地南部の遺構（西より）



調査地北東部の遺構（西南より）



S B - 7 と S X - 1 (東より)



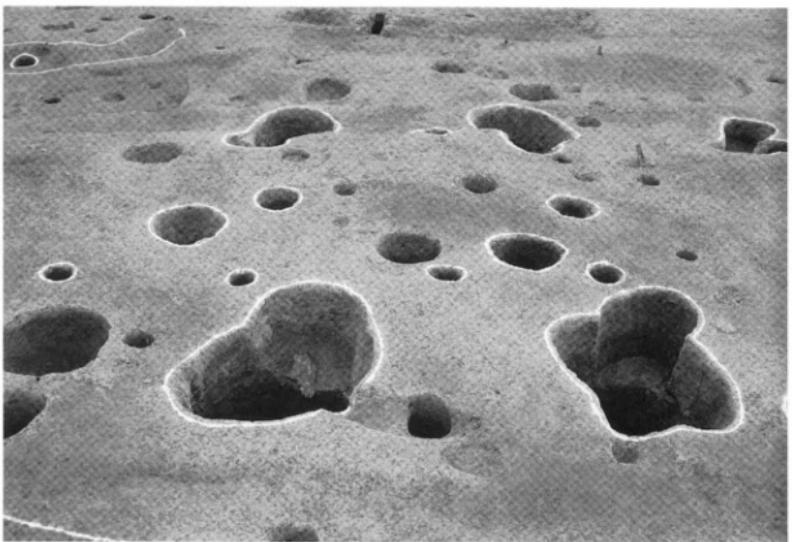
S B - 8 (北東より)



S B - 8 (南より)



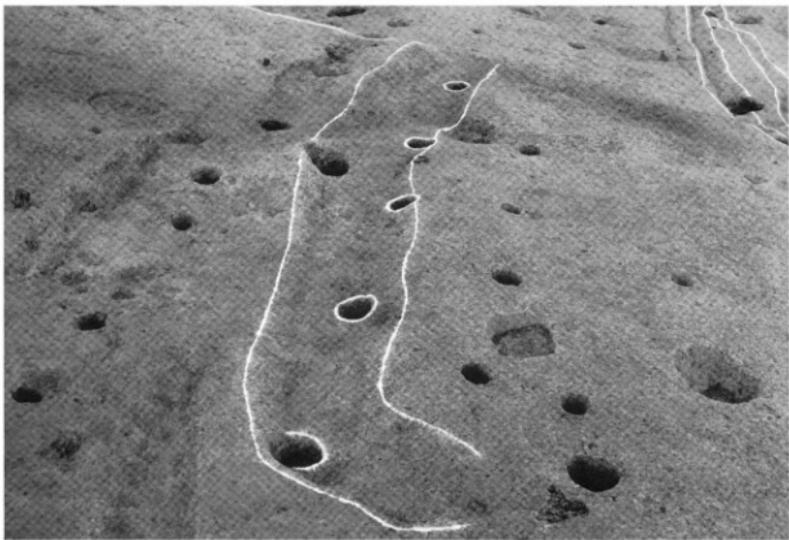
SB-18周辺の遺構（西より）



SB-18（北東より）



S B - 16 (北より)



S D - 3 と S A - 6 (東南より)



S A - 8~10 (南西より)



S B - 3 遺物出土状況



S X - 3 と S D - 9 (北東より)



S D - 9 遺物出土状況



包含層遺物出土状況



S B - 14 遺物出土状況

10



SB-1 出土遺物

10

11

15

12

18

14

13

16

17

SB-2 出土遺物



S B - 3 出土遺物(I)

12

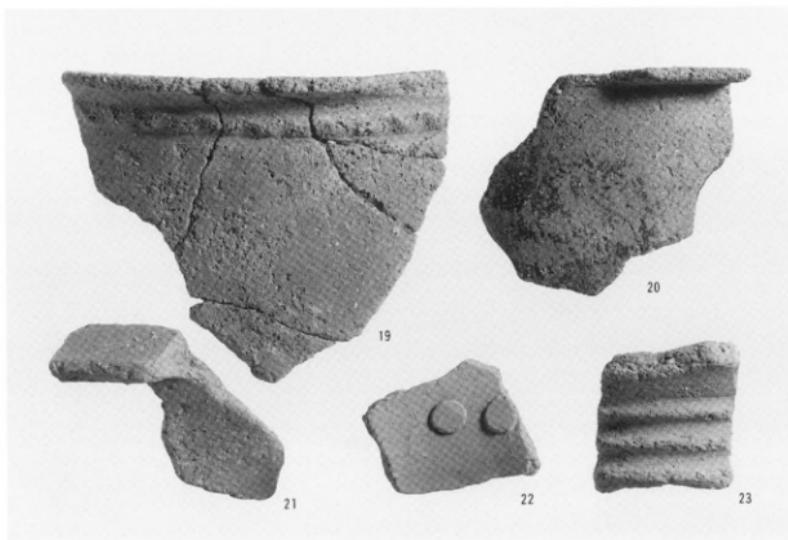


24



24

S B - 3 出土遺物(2)



19

21

22

23

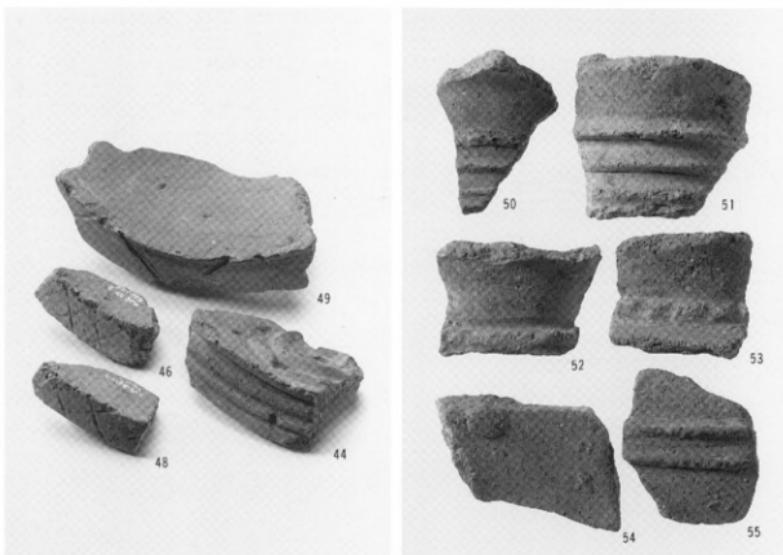
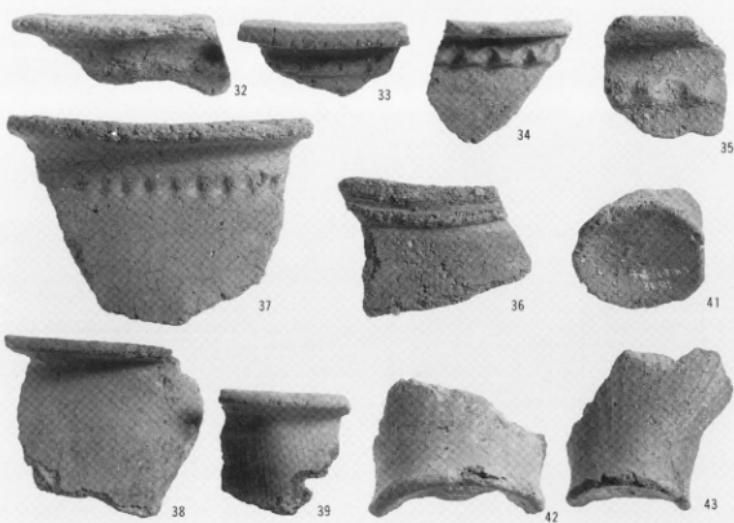
S B - 3 出土遺物(3)



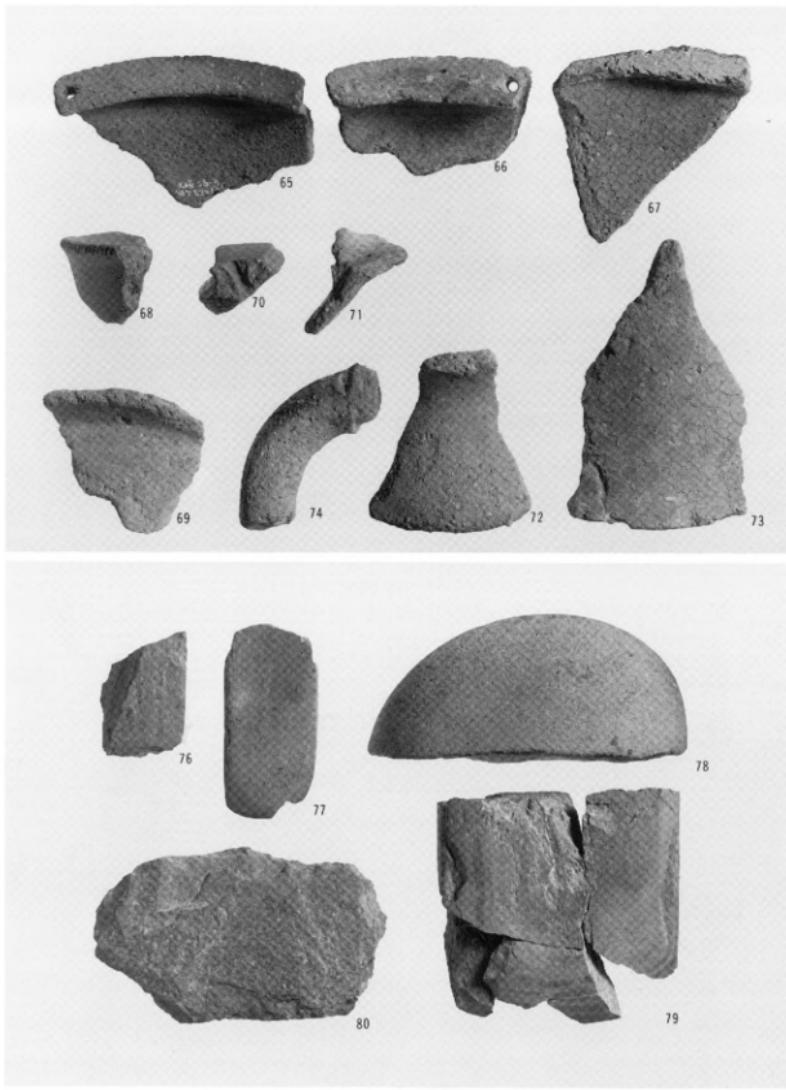
SB-4・5出土遺物 (25・26: SB-4, 27・28: SB-5)



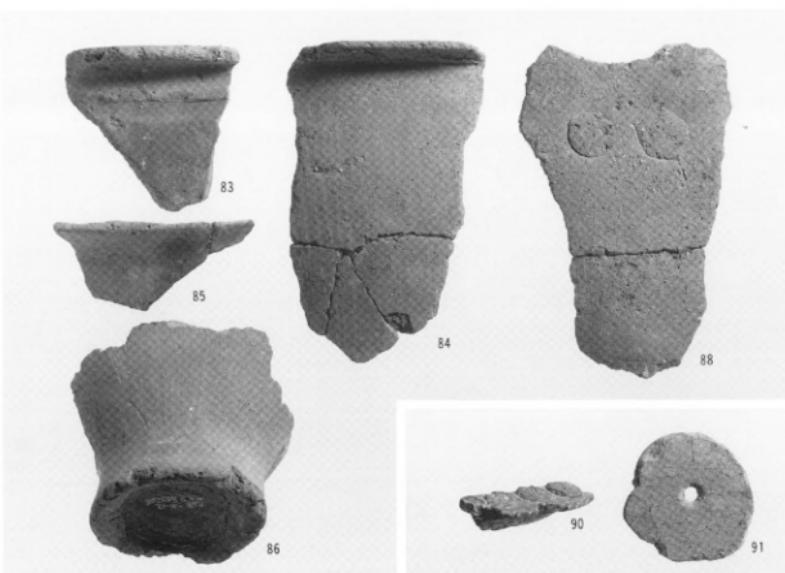
SB-6・7出土遺物 (29・30: SB-6, 31: SB-7)



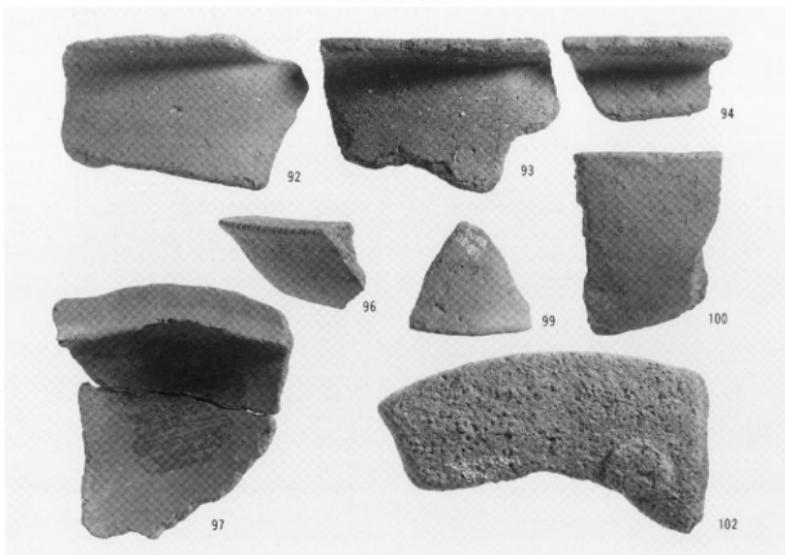
S B - 8 出土遺物(1)



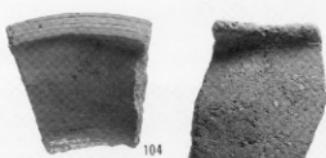
S-B-8 出土遺物(2)



S B - 12出土遺物



S B - 13出土遺物

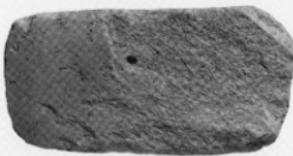
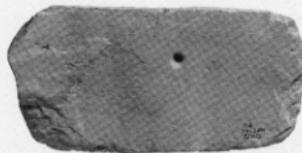


104

105



110



112



113



116

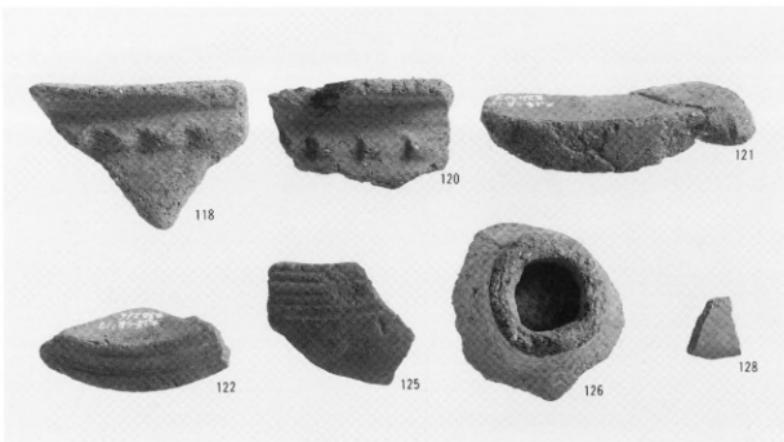


117

118

S B-14・16出土遺物 (104~113: S B-14, 116~118: S B-16)

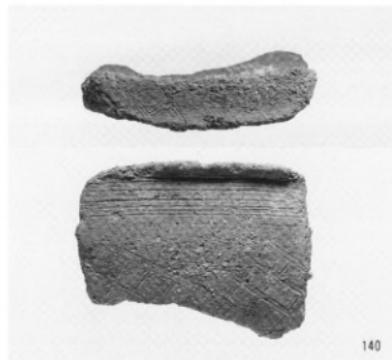
18



S B -17出土遺物



S B -18出土遺物



SD-3 出土遺物

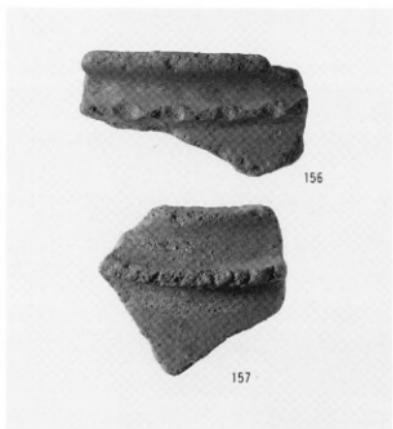


SD-5 出土遺物



149

SD-9 出土遺物

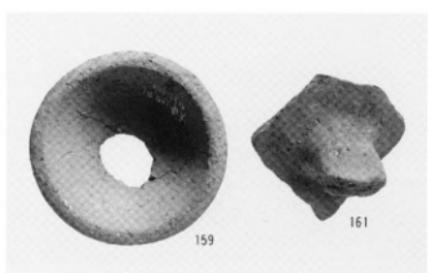


SX-3 出土遺物



165

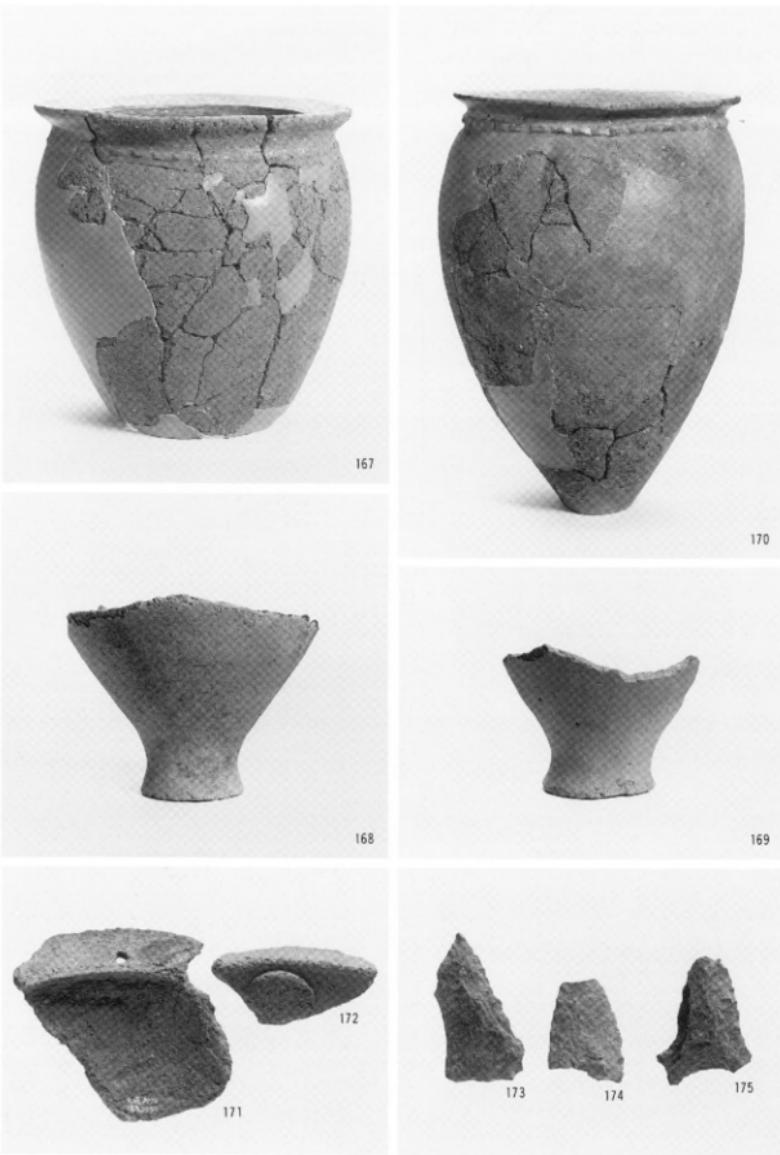
SK-5 出土遺物



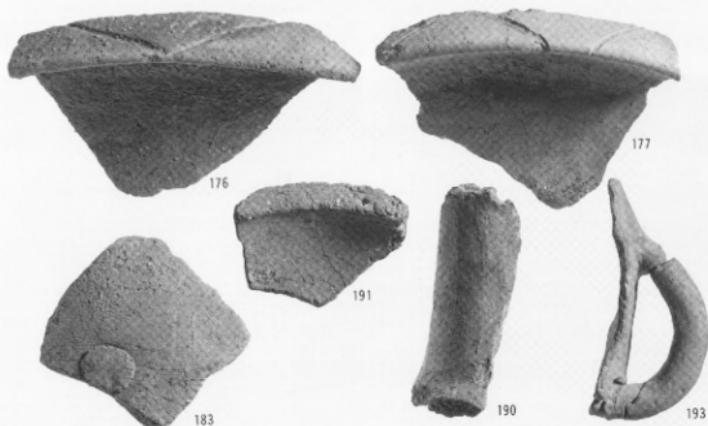
159

161

SA-2 出土遺物



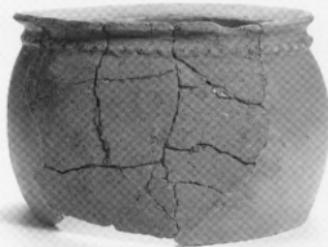
柱穴出土遺物



178

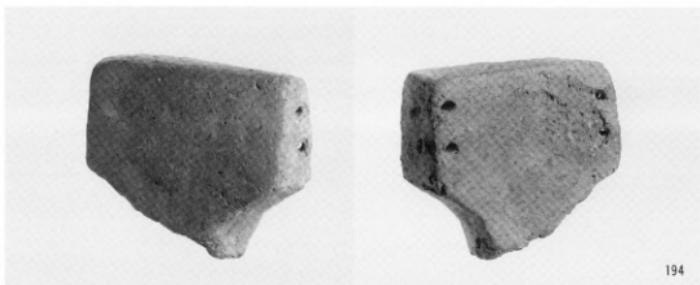


192



188

包含層出土遺物(1)



194

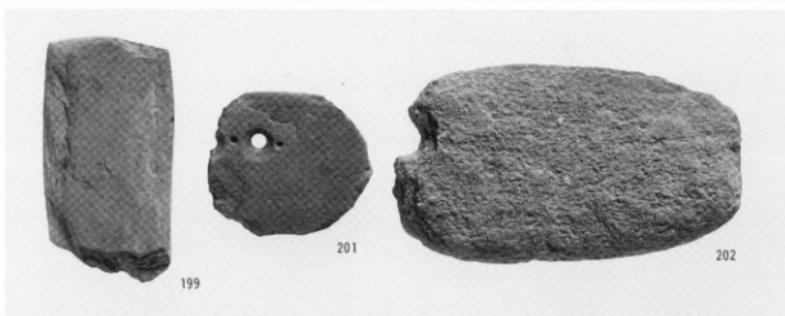


195

196

197

198



199

201

202



208

209

203

204

205

206

207

包含層出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	おおみねがだいいせき だいよじちょうさ							
書名	大峰ヶ台遺跡－第4次調査－							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4.8集							
編著者名	栗田茂敏							
編集機関	財団法人 松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター							
所在地	〒791 松山市南窓院町乙67-6 Tel 0899-23-6363							
発行年月日	西暦 1995年 3月 31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号			
大峰ヶ台 4次	愛媛県松山市 南江戸	38201		33° 50' 33"	132° 44' 38"	1987.11.04～ 1988.05.12	1,500	松山総合 公園建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大峰ヶ台 4次	集落	弥生	堅穴式住居 掘立柱建物 溝、櫛列 段状遺構	弥生土器、石器 分銅形土製品 玉		弥生時代中期の 高地性集落		

松山市文化財調査報告書 第48集

大峰ヶ台遺跡 —第4次調査—

平成7年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会

発行 〒790 松山市二番町4丁目7-2

TEL (0899) 48-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

〒791 松山市南斎院町乙67番地6

TEL (0899) 23-6363

印刷 原印刷株式会社

〒791 松山市山越4丁目8-15

TEL (0899) 24-8823
